

松と藤芸妓の替紋

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂・編纂

青空文庫

今日こんにちより改まりましたして雑誌が出版になりますので、社中かわ
 るもちまえ／＼持前のお話をお聴きに入れますが、私わたくしだけは相変らず人情
 の余りお長く続きません、三冊あるい或は五冊ぐらいでお解りになりま
 する、まだ新聞に出ませんお話をお聴に入れます。これは明治四
 年から六年まで、三ケ年の間お話が続きます、実地あつたお話で
 ございます。さて俗語に苦は樂の種、楽しみきわ極まって憂いありと
 申しますが、苦勞をなすつたお方でなければ只今、お樂になつて
 入らつしやるものはございませぬ。大臣参議いえどと雖も皆戦争ちまたの巷を

くゞり抜け、大砲の弾丸たまにも運うん好よく中あたらず、今では堂々たる御おんか方たにお成り遊ばして入らっしやるのでございますがまだ開ひらけません時分、亜米利加アメリカという処は何どういう処か、仏蘭西フランスはどんな国だか分らない中うちに洋行をなさいまして、然そうしてまた何うも船の機械も只今ほど宜よく分つても居りませんでしたのに、危険を凌しのぎ、風波ふうはを冒おかして大洋を渡りなど遊ばして苦心をなすつたから、只今では仮令たといお役所へお出で遊ばさないでも、年金を沢山お取り遊ばすというのも、その苦勞をなさいましたお徳でございます、だから余り樂をしようと思つと、却かえつて是が苦しみになりますことで、私わたくしなどは毎日喋つて居りますから、ちと樂を為しようと思つて、一日喋らずに居たら何うだろうという、これが苦勞の初まりで、

一日黙つて居るくらい苦しみはありません。何もそんなに黙つて
 居るにも及びませんが、退屈でなりませんから、これは堪らぬ、
 ちとそろ／＼表を歩いたら楽に成るだろうという、これが苦し
 みの初まりで、最う寝足ねあしになつて居りますから歩くと股ももがすくん
 でまいり、歩行が叶かないけませんから、そこらの車へ乗つて家うちへ行つ
 たら楽だろうと思つて、車へ乗ると腰が痛くなつて堪らないから、
 仰あおむけ向むに寝たらば楽になるかと思つと、疝せんき氣きが痛くなつたりして
 いけませんから、廊下へ出でて躍おどつたら宜よかろうというように、実
 に人は苦の初めを楽しむと云つて、苦勞の初めばかり楽しみます
 ことを考えますものでございます。「瓶かめに挿さ 《き》す花見ても
 知れおしなべてめづるは捨すつる初めなりけり」という歌の心は、詠なが

めは誠にどうも総々ふさくとした此の牡丹は何うだい、宜いいねえ水を上げたところは、と珍めづらしがつて居りますが、長く活いけて置けばばらくと落ちて来ますから、あゝ穢きたない打棄うちちやつてしまえと、今度は大山蓮華おおやまれんげの白いのを活いけこの花の工合ぐあいはまた無いと云つてゝも、末になると黄色くなつてばらく落ちますから捨てゝ、今度は秋草あきくさが宜よいと云つた所が、此れもそう何時いつまで迄も保たもちは致いたしません、直すぐに萎しおれてしまいますから挿換さしかえるといふように、世の中の事は此の通りでございます。マア何でも苦勞をなさらんければいかんといふことで。これは松平肥後様まつだいらひごの御家来で、若い中うちにさん／＼道樂を致し、青森県の方にお出でがありました、ちようど函館の戦争に出逢つて危あやうい処のを免れ、ちよう／＼の事で世界

が鎮まつてから横浜へ出てまいり、外国人と取引を致し、凶らざる処の幸福を得ました処から、まだ東京は開けません時分故、洋ようぶつてん かんだみとしろちよう

物店を 神田美土代町 へ開きました。大層繁昌致しました。

此のお方は苦勞人の果ゆえ、仮令たとい芸人を扱つても、芸者を相手にしても、向うの氣に入るような事ばかり云います。今日こんにちは身装なり

の拵こしらえがくすんでも居ず華美はででも無い様子、ちよつと適當なりの装に

拵え、旧九月四日の事でございましたが、南部なんぶの藍あいの万筋まんすじの下

へ、琉球りゆうきゆうの変り飛白がすりの下著したぎ、まだ其の頃は余り兵児帯へこおびは締め

ません時分だから、茶献上ちやけんじようの帯を締め、象牙ぞうげへ四君子ほの彫つ

てある烟管筒きせるづつが流行はやつたもので、烟草たばこ入れは黒棧くろざんに金の時代

の宜いい金物を打ち、少し色は赤過ぎるが、珊瑚おの六分半もある緒

締じめで、表付ののめりの駒下駄らっこ、海虎の耳付の帽子しやっぱが其の頃流行
つたものゆえ、これを冠かぶり上野の広小路を通り掛ると、大茂の家だいま
から出て来ましたのは、其の頃数寄屋町すきやちようにいた清元三三八とい
うたいこもち 間までございませうが、幫間いろうくにも種々有りまして、野幫間のだいこ
もあれば吉原の大幫間おおだいこもあります、町の幫間たいこでも一寸品の宜よ
いのもあれば、がらく致いたして、突いきなり然とこ人の処とこへ飛とびこ込んで硝子戸
へ衝突ぶつかり、障子うちこわを打うち毀こわすなどという乱暴なのもありますが、
この三八は誠に人の善よい親切な男で、真ま実めに世話をするので人に
可愛めがられますけれども、芸は余り宜よくは有りませぬ。四よつ入いり青おう
梅めの小さい紋の付きました羽織を着て、茶献上の帯を締め、ず
かとびでくとびでと飛とび出て来て、三橋みはしの角で出会あいました。

旦「おい師匠々々」

三「これは旦那………何方へ」

旦「此処で君に遇おうとは思いきやだ」

三「先達ては誠に有難う、あの時旦那がお帰りになつたのを知

らないで、御酒を戴き過して、気を許して寝てしまい、お帰りに

なつた後で目が覚めて驚きましたが、二度目にお目にかゝつた時、

寝たの寝の字もおつしやらないなぞてえのは、実に貴方のような

苦勞をなすつたお方は沢山無えつて、蔭でのろけて居りますんで」

旦「君に惚られちやア有難てえフ、」

三「からかつちやアいけません、何方へ入らつしやいました、

此の間お宅へお寄り申そうと思ひまして参ると、番頭さんが何と

か云いましたつけ、治平じへいさんかえ、武骨真面目なお方で、伝うんとお店に坐っている様子てえものは、実に山が押出おしだしたような姿で、何となく気がつまりましたから、裏口から這入はつてお内儀かみさんにお目通りを致いたしましたが、坊ちゃんは大層大きくお成なんなさいましたな」

旦「彼あれは坊じやない嬢だよ」

三「へえお嬢さんでげすか、そう仰しやれば何処かお優しい品の宜よいところが有りましたよ」

旦「何うも君は押付けたような事をいうのが面白い……君に出会つてこのまゝ別れるのは戦争いくさの法には無ねえようだから、何どうだえ何処まかでお飯まんまを喰たべてえが付合あわねえか」

三「これは恐れ入りやすな、私の腹わたくしの空へった顔が貴方にちやんと解るなんてえのは驚きやしたなア、何うか頂戴致したいもので」

旦「君何処へ往つたのだえ」

三「なに少し大茂へちよいと」

旦「周旋かえ」

三「いえ然そうじやア無いんですが、方々へ種いろん々な会がありますと、

ビラなんぞを誂あつちえられてるんですが、御飯ごはんを召上るてえならば

非此処じやア松まつげん源さんでげしよう」

旦「松源てえば彼処あそこで五六度呼たひんだ小こしめだのおいとだのと云う

好い芸者うちの中で、年若の何とか云つたツけ、美代みよちゃんかえ」

三「え、美代ちゃん、へえ美代みよきち吉」

旦「彼はあれは好い娘だね、品が有つて実にお嬢さん然として居るね」

三「成程彼はあれは旦那のお氣に入りましたようよ、旦那は種々いろんな真似をなすつて諸方で食くい散ちらかして居らつしやるから、却かえつてあんなうぶなお嬢さん筋で無くちやアいけますまい、彼は極温ごくおとなし順なくつて宜うございますから、お浮うかれなすつちやアどうです」

旦「君は直すぐに然そう取持とりもち口ぐちをいうから困るよ、併しかし色氣は余所よそにして何となく何うも己おれは彼あれが慕したわしいね」

三「美代ちゃんも然ういつて居ますよ、美代ちゃんも旦那の事ばかり蔭で褒めてまして、あんな好よい旦那は無い、あの旦那に会うと何となく心嬉こしいてツてます」

旦「なにお幫間たいこを云つちやアいけない、あれは抱えか又娘分かえ」

三「あれは娘分なんでですが、彼^{あすこ}の婆^ばほど運^よの好い奴はありません、無闇に金ばかり溜めて高利を取つて貸すんでですが、二月縛りで一割の礼金で貸しやアがつて、彼の位^あの者は沢山^{たんだ}ア有りませんね、それが何うもあゝいう奴は娘^こを抱えると、直^{すぐ}に美代ちやんのお母^{つかあ}が死んでしまうと、往^いき所の無^ねえのを幸^{さいわい}にずるゝべつたり^しに娘に為ちまつたんでですが、あんな運の好い人はありやせん」

旦「何か情^{いろ}夫でも有るのかえ」

三「なにそんな者はありません、只温順^{おとな}しい一方で、本^{ほん}当^とにまだ色^{いろ}氣^きの味も知らない位でげす、付^{つき}合^{あい}で何^ど処^こかへ往^いけなんてえと御免^{ごめん}なさい、お母^{つか}さんに叱^{ちか}られると云つて位^{くらい}なんで」

旦「何うかして彼の娘を呼出す工夫をして居るんだが、お母に取
入つてお母と付合になつちまつてから、其の後彼の娘をお貸しな
上手へ往くとか、一晚泊で多摩川の鮎漁へ往こうと云つても、若
い者じゃア婆さんも油断はしめえが、此方は最う四十の坂を越え
て居るから安心するだろう」

三「貴方上手なんぞへ連れてつて何うなさるんで」

旦「いやさ、彼の娘を連れてつて、情夫がある種を知つて居るか
ら兩人しつぽり会わして遣らうツてんだが何うだえ」

三「こりやア恐れ入りやしたね、何うもこれは出来ない業でげす
な、ちよいと玉を付けて、祝儀を遣つた其の上で、情夫に会わし
て遣るなんてえ事は中々出来る事ちやア有りやせん、間夫が有る

なら添わして遣りたいてえ七段目の浄瑠璃じやアねえが、美代ちやんに然う云つたらどんなに悦ぶか知れやアしませんよ、旦那のことだから往渡り宜く家へ往つて然う云つたら、美代ちゃんの母親さんも何んなにか悦びませう、併し彼の婆は何うも慾が深えたツてなんて、彼んなのも沢山はありません、慾の国から慾を開きに来て、慾の学校が出来たら直に教員に為るてえ位な慾張で、あの肥つてるのは慾が肉と筋の間へからんで、慾肥りてえのは彼から初まったでげす……じやア美代ちゃんの家へ入らつしやいまし」

と三八が先に立ち数寄屋町へ這入り、又細い横町へ曲り、旦「此方へ曲るのかえ」

三「此方へ入らつしやい……え、此処で、有松屋という提ちようち

灯んの吊してある処で」

旦ほつけしゆう「法華宗なのかえ」

三「何でも金にさえなれば摩利支天様でもお祖師様でも拜そしさまむんで、

それだから神様の紋もんじら散しが付いて居るんで……母おふくろ親さん今日こんち

は、お留守でげすか……美代ちゃん今日は」

婆「あい誰だえ、安やすどんかえ」

三「あれが婆ばあの慾ぼから出る声でげすが、酷ひどいもんで……え、三八

でげすよ」

婆「いやだよ何だねえ、ずっとお這入りな表からお客様振つてさ」

三「御免なせえまし、へ、へ、今日は……」

婆「此の間はあれつきり来ないもんだから、わたしは本当に困つたよ、皆さんから後あとで話が有つて………これからは持つて一々来て見せなくちやア困るじやアねえか」

三「ところが梅素ばいそさんの処へ往くと、びらが一ぺえ来てえるので、待つて書いて貰いましたんで、大きに遅くなつたんでげすが、その代り美代ちゃんなかしくはちやんと中軸にして、そこらは抜目無くして置いた事は、後で御覧なすつても解りますが、時に今ね母親さん美土代町の奥州屋おうしゅうやの旦那がね、ほんとに粹すいな苦勞人で、美代ちゃんを呼んで度々たびくお座敷も重なると、家うちで案じるといけないから、ちよいとお母さんにあかして仲好なかよしに成りてえと仰しやるから、お連れ申して来ましたんで」

婆「あれまア何うもまア表に居らつしやるの……何うぞ此方こつちへお上り遊ばして下さい、まことに思い掛けない事で、何うぞ此方こつちへ……師匠こつち此方へ案内してお上げ申しておくれよ」

三「へ、此方こつちへお上んなさいまし」

旦「はい御免……お母さんお初にお目にかゝります、毎度美代ちやんを呼んで世話を焼かしますが、何うぞ心安く……」

婆「まア何うも宜く入らつしやいました、毎度また彼あれを御ご鼻ひ尻きに遊ばして有難う存じます、宜くまア此様こんな狭い汚ない所へ入らつしやいました、何時も蔭でおうわさばかり致して居ますの、何うかして一度お目にかゝつて置きたいと思ひまして、師匠にも然う申しましたら、その内に案内をしようと云つてくれましたが、ま

たお楽たのしみの処へ出ましてもお邪魔だろうからと存じて控えて居ま
 したが、毎度御鬘たもともち様になりまして有難う存じます、あんな結構
 な袂たもともち持がっさいぶくろや合切袋がっさいぶくろや金の指環など見たこともない物を下す
 って、あれがお湯などに箆はめて参りますから、そんな結構な物を
 箆めてお湯に這入るのじゃア無いよ、金より其の上に善い物は無
 いからと云いまして、今の若い者は開化とか何とかいう事を知
 って居りまして、人のいう事をば些ちっとも聞かないで矢張箆めてお
 湯に這入りましたりして、ぞんざいに致しまして、何うも持もちぎつ
 ぺいが悪くて仕方がございませぬ、お客様が折角のお志で下すつ
 た物を、粗末にしたり落しちやア済まないよ、お志を無にするか
 らと申しまして、あの通り頑がんぜ是ぜがございませぬから、何時まで

も子供のようでごさいますして仕方が有りませんが、何うぞお見捨
なく何時までも御鼻屑を願います、此の間もあなた遅く帰つて来
まして、お母さんお案じでないよ、奥州屋の旦那様が外ほかに何どんな
無理なお客が有つても、十二時を打つたらずんく帰れと云つて
下すつたが、そんなお客様は無いてツて何時も旦那様のお噂ばか
り申して居りますので」

三「何なんしろ美代ちゃんをちよいと」

婆「今お湯から帰つて、ちよいと二階で身化粧みじまいをして居ますよ」

旦那「それは丁度好いい所だった……師匠お母さんに其のオイお土産
を……」

三「左様で……母親さんには是だけ……女中は慥たしか両人ふたりでした

ねえ……これは旦那から」

婆「まあ何うも有難う存じます、何ぞ旦那様へ宜しくお礼を仰し

やつて下さいまし……旦那これからは何うぞ何方へ往らつしやい

まして、御膳を上りましても詰らない御散財でございますから、

美代吉の所へ往つて惣菜で安く食べて往こうと云うようにお心

易く、ちよいく入らつしやつて下さいまし、然うすると此方

でも誠に気が置けませんで宜しゆうございますから、これを御縁

として何うかちよいく入らして下さいまし……お前方皆な

此方へ来てお礼を申しな」

下「誠にどうも有難う存じます」

旦那「いや何うもお礼では痛み入ります」

三「お母さん何か一寸お飯物を色取りして何うか……」

婆「はい畏りました……ちよいとあの美代吉や下りてお出で、美

土代町の旦那様が入らつしたよ」

美「はい」

と返事をいたし、しとく階を下りて参り、長手の火鉢の前

に坐りましたが髪が、結い立でお化粧の為立てで、年が十九故十

九や二十という譬えの通り、実に花を欺くほどの美しくい姿で、

にやりと笑い顔をしながら物数云わず、

美「よくお出でなさいました」

旦「今広小路で師匠に会ったからちよいとお母さんにお近附に

成ろうと思つて来たのさ」

三「美代吉さん、何うも私の方は慾でげすが、旦那の方は御厄介になつて余り感心しないが、それを一緒に往くと仰しやるのでお供をして此方へ来たのてえのは、其処に種々御親切な話が有るんで、本当に後でお聞せ申したい事が有るんでげすぜ」

美「それはほんとに嬉しい事ねえ」

婆「今お土産を戴いたよ」

美「毎度有難う存じます」

三「何か旦那の召上り物を何うかお早く」

婆「此処らでは鳥八十さんが早いから、彼処へ往つて何か照り焼か何かで、御飯を上るのだから色取をして然う云つて来なよ、宜いかえ、御飯は家のは冷たいから暖かいのを三人前に、お香物

の好いいものを持って来るように然う云つてくんな、あれさ家のは臭くていけないから、これさ人のいう事を宜く聞きなよ、それからお菓子を、なに落雁じやアないよ、お客様だから蒸菓子の好いいのを」

と下女に云附あつらけ、誂あつらえ物の来る内、何か有ありもの物でちよいとお酒が出ました。この奥州屋の新しんすけ助は一体お世辞よの善よい人で、芸者や何かを喜すばせるのが嗜すきな人だから、何か褒ほめようと思つて方々う／＼見廻うしたが、何も有りません。三尺の壁かべどこ床とこに客の書いたものが余り宜い手では無く、春風しゅんぷう春水しゅんすい一時いちじ来きたると書いてあり、紙かみ仕立じだての表装ぶくで一幅ぶく掛けてありますが、余り感心致あしません。其その傍そばの欄間らんまに石版画の額が掛けてありますが、葡萄ぶどうに木き

ねずみ
鼠の画えで何も面白い物がありません、何か有つたら褒めよう／＼と思つて床の間の前を見た処ことうが古銅の置物というわけでもなし、浅草の中見世なかみせで買つて来たお多福の人形が飾つて有り、唐戸からどを開けると、印度物いんどのものの観世音かんのんの像に青磁の香炉があるといふのでなし、摩利支天様の御影みえいが掛けて有り、此方こつちには金比羅様のお礼お狸さま、招き猫などが飾つて有るので、何も褒めようが有りませんから、二枚折おりの屏風の張交はりまぜを褒めようと思つて見ると、團だんじ十郎ゆうろうの摺物すりものや会の散ちらしが張付けて有る中に、たった一枚肉筆たんぎよくの短冊たんさくが有りましたから、その歌を見ると「背くとも何か怨みん親として教えざりけんことぞ口惜くやしき」といふ歌が書いて有つたのを見て、奥州屋新助びつくは恟びつり致しましたと云うのは、自分が

二十四歳の時に放蕩無頼ほうとうぶらいで父も呆れ、勘当をすると云つた時に、此の短冊を書いて僕に渡し、汝おのれの様な親に背いた放蕩無頼の奴は無いが決して貴様を怨みん、己おれの教えが悪いによつて左様な道楽の者に成つたのだ、此の短冊は己わが形見で有るから、是を持つて何処どこへでも往いけと云つて、流石さすがの父も涙を含んで私わしの手に渡した時に、若氣わかげの至りとは云いながら手にだに受けず、机の上に置去りにし、家うちを出た此の短冊が何うして茲ここに有つたかと、余り思い掛ない事だから驚いたが、素知らぬ体ていで、

旦「美代ちゃん、屏風に張つて有るあの短冊は何処から貰つたのかえ」

美「なに、あれはいけないのですよ、張はりませ交まぜが足りないから何で

も安どんが出せと云いましたから、反古ほごの中に皺くちやになつて居たのですが、あれは私わちきのお父さんとつが書きましたので」

旦「え…お前めえのお父さんが…何かえお前まえのお父さんは会津様の御家来で、松山まつやま久馬様と云つて七百石取つたお方だろうね」

美「あれまア旦那何うして私わちきの親父おやじを御存じなの」

旦「いえなに…わしは若い時分から歌俳諧が好きであつたが、風流の道というものは長崎はての果の先生でも、奥州の人とも手紙の遣り取りをして交際つきあいをするものだがね、久馬様はおなくなりになつて、惣領のお兄あにいさまは上野の戦争で討死うちじにをなすつたということを聞いたが、お母さんは未だ御存生ごぞんしょうかえ」

美「何もかも旦那はよく御存じですが、私わちきは母と一緒に上野の先

の箕みの輪わという処へ参りましたは、前ぜん々勤めていた家来うちの家で
 有りますから、そこへ往つて暫く厄介になつて居ます内に、母が
 煩わづらい付きましたが、長煩い故病院へ入れる事も出来ませんように
 なつたので、仕方なく私はこんな処へ這入りましたが、その甲斐
 もなく一昨年おととしの十一月なくなりましたよ」
 旦那「え、おかくれかい、それじゃアまあお母さんを救うためにお
 前は芸者になつて、云いつけもしない世辞をお客に云つて居るの
 だろうが、宜くまア親のために苦勞をして居るねえ」
 美「はい、私わちきは外ほかに親戚みより頼りも有りませんが、只ただ一人なか仲なの兄あの
 ある事を聞いて居ましたが、若い時分道楽で、私が生れて間もな
 く勘当になつて家出をしましたが、随分気性な人ゆえ戦い

争くさにでも出て討死もしかねない気性ですから、大方死んでゞもし
 まつたろうと常々母おふくろ親が申して居りましたが、その兄さえ達者
 なれば会う事も有りましたようが、尤も小さい時に分れたのでござ
 いますから、途中で会つても顔は知れませんが、何卒どうぞして
 生きて居るなら、その兄に会いたいと思ひまして弁天様へ願掛がんかけ
 を致して居りますけれども、いまだに知れませんが、本当に私
 は独りぼっちでございます」
 且「然うかえ、お前が生れて間もなく分れた兄にいさんだから、顔形
 も知れまいが親身の兄と思えばこそ然うやつて神信心かみしんじんをして会
 いたいと願掛までして居ればこそ、ふといやなに…屹度きつと会うよう
 な事になるに違いないが、その事を兄あにさんが聞いたら嘸悦さぞぶだろ

う、然うかえ……どう云うわけだか松源へ初めてお前を呼んだ時から、何となく私の子わしのように思われて可愛いと思つたが、妙なものさね」

三「へえ美代ちゃんわしは久馬様のお嬢さんなんでげすか、道理で初めから久馬様の相が有りましたよ、何かその遊ばせ言葉などの所は違ちげえねえ、成程七百石のお嬢さまなんで……」

旦「私わしはお前のお父さんには歌俳諧の道で御鼻肩わしになつたこともあり、十九年振でお前に会うとは誠に妙だ……師匠何うも妙だな」

三「まことに妙でげすね……併しかし何だか大變に陰氣になつたじやア有りませんか」

旦「どうか此の娘こを身請みうけを致し度たいものだ」

と是从から美代吉の身請の相談に及ぶ。これが一つの間違いに相成るお話でございます。

二

奥州屋新助が、美代吉を我が実の妹いもとと知りまして身請の相談に及びましたが、娼妓の身請はよく有りますけれども、芸妓の身請は深川ばかりで、町芸妓の身請という事は余り昔は無かったものでございますが、開ひらけて来るので当時は身請が流行でございます。

新「おい師匠々々」

三「へえ」

新「ちよいとお母つかあに君から相談して貰いてえな、何と此の娘こを身請えしてえんだが、馬鹿な事を云われちやア困るんだ、大て概えげえ相場も有るもんだが、何うだろう、身請をするには何どのくらしいものだろう」

三「それは何うも大変に芝居が大きくなって来ましたね、この娘むすめを身請えな為なすつても御妻ごさいくん君の方は」

新「なに僕がこの娘を受出して権妻ごんさいにしようてえ訳じやアねえが、あの娘のお父とつさんには、昔風流の道で別懇にして御恩を受けたこともあるし、親戚みより頼りもねえという事だから、あの娘こを身請して、好いた男と添わしてやって松山という暖簾のれんでも掛けさせて、何処かへ別家を出して遣りたいのだ、そして久馬様の御位牌を立て、

てさせたいと思うが何うだろう」

三「恐入りやしたねえ、何うも御親切の事で、へえ：併しかし貴方の御親切を先方で買うと宜いいけれども、彼の婆かアが中々慾が深いから買いませんで、大きな声じやア云えませんが、あの通り慾ふとで肥ふとつてくるくらいなんですから、身請となると何どんな事を云出すか知れませんか」

新「だからサ、親類づきあいでおめえから話をしておくれな」

三「へえ、兎に角一つ話をして見ましよう……お母つかさんく」

婆「はい」

三「ちよいと少し此方こつちへお出でなすつて、へへ、へへ、且那の前では話し難にくいんで」

婆「厭だよ三八さん、こんな婆ばあを蔭へ呼んで何をするんだよ」

三「ときにお母さん、外ほかじや有りませんが、今旦那がね、美代ち

やんのお父さんと心安くして、むかし御恩になった事もあるてえ

ので、美代ちゃんを身請して松山とか久馬様とかいう暖簾を掛け

させ度たいッてんで、何も色に惚れて権妻にするてえような訳では

無いので、親類交際の身請てえのでですが、これは私も思うのに

お前の為になると考えます、あの方の事だから身請を為しッ放ばなして

え訳じやア無いのだからお前も思い切ってお仕舞いなさい、併しかし

盛りの娘を手放すつてえのだから無理だが、後あとの為を考えるとね、

実は私もちよいと旦那と打合わした処も有るから、思い切つて美

代ちゃんを手放して下さいな、娘が出世すると思えば否いやという訳

は有りやすめえ」

婆「まことにどうも有難うございますね……旦那ア本当でござい
ますか……、何だか三八さんは時々おかしな事を言出しますが」

新「実は今師匠にも話したんだが、あんまり贅沢のようでお母さ
んきまりが悪いが、初めて会った時から何んなとなく美代ちゃんなが
可愛くつて仕様が無いから云出したのだが、併し話をするのは今
日はじめが初めて、何うかしてお父さんのお位牌でも立てさせたいと思
い、また私わたしは別に兄弟も何も無いから、此の娘を請出して私の妹わたし
もとぶん分しに為たいというは、此の娘の様な真実者なら、私の死わたし水しにみず
も取つてくれようとういう考えなんだが、親類交際で身請を為
てしまったからツて、何も是これツ切きりお前の処へ来ないという訳でも

無く盆暮には屹度きつと顔を出させるようにします、差支さしつかえは有りま
すまいが、また斯こういう雛妓こどもを抱え度たいとか、あゝいう出物でものの著き
物ものが有るから買いたいと云う様な時にも、お前さんの事だから差
支も有るまいが、然そういう時には金きん円えん：また私わたしが御相談をして
も善いのだがねえ」

三「旦那が只何うも美代ちゃんが可愛くつて、娘か妹のように思
われて、丸めて喰たツちまい度たい位なんで」

婆「誠に何うもそれは有難い事でございます、実に彼あれの身みの出世
でございます、彼も何時までも芸妓をして居ては詰りませんから、
能よい加減な時分に何うか身を固めさせなければならぬと申して
居たのでございますが、昔は芸妓を受出すにも造作も無い事でご

ございましたが、今では身請というと実に方々さまの相場が大変な事で……」

三「ほうらそろ／＼始まった、これだからうっかりした事は云われない……お母さん然う前置から詞を振ことば振ふらずに前文無しで結け著ちやくの所を云つて下さらなくつちやア困りやすで……旦那あなたの思お召ぼは」

と袂たもとの中へ手を入れて、指を握り合つて相談をする。

三「え、成程……お母さんちよいと手を私の袂の中へ突つ込んで下さい、これが流行物はやりものだから何うでげしよう、このくらいでは」

婆「はい……誠に有難い事でございますけれども、お師匠さん、私どもは外に宜いい抱えも無いのでございます、今美代吉が出てし

まえば、何れ誰か外ほかに宜よい抱えしを為なければなりません、そんならばと云つて出たから直すぐにお客が附くという訳でもなしし為しますから、それでも何うも少し話が折合いませんねえ」

新「じゃアお母さん何うぞ五百円ぐらいの所で話を極めておくんなさいな」

三「お母さん、そんなら宜うございましょう、こんな相場は有りませんから」

婆「誠に何うも有難い事でございます」

新「僕も少し頼まれた事が有つてその実は横浜まで買物に往ゆかなければならんから、それでは明後日あさってという事に極めましょう、何が無くとも赤の御飯ぐらい炊いて、目出度い事だから平常ふだん馴染なじみの

芸妓衆しゆでも招よんでね」

婆「誠に何うも有難い事で、然そんなれば是非明後日はお待ち申します……美代吉や、ほんとに御親切なんて、何うもこんな有難い事は有ありやアしないよ……お間違ひ有りますまいね」

新「間違える所どこじゃない、お母さんの方でさい違わなけりやア、此方こつちで約を違たがえる気遣ひは無ないのだから」

婆「実に何うも有難い事で、左様なら明後日は何時なんじごろ頃に入らっしゃいます」

新「二時少し廻った時分迄には屹度来るから、其の積りやくじよで約やくを極めてさえ置けば宜いいのだ」

三「美代ちゃん大変に宜よい事が有るんで」

と幾ら傍そばで云つても美代吉は少しも嬉しい顔付が無いというは、
 本所北割下水ほんじよきたわりげすいに旗はたもと下の三男で、藤川庄三郎ふじかわしようざぶろうという者
 と深くなつて居ますが、遣い過ぎて金が廻らなくなつたので、有
 松屋へ行つても不挨拶ぶあいさつをするゆえ来にくゝなり、何うも都合が
 悪いと見えて、茶屋小屋から口を掛ける事もなし、此の頃では打う
 絶ちたえて逢いませんので、美代吉も氣を揉んで居る処へ身請の話に
 なり、胸が痛く、

「はい」

と忌いやアな返事をしました。所へ来ましたのは藤川庄三郎で、此
 の頃では深川六間堀ふかがわろっけんぼりへ蟄息ちっそく致して居ましたが、駿府すんぷから親
 族の者が出て来まして、金策が出来、商法の目的を付け、何どんな

所へでも開店し為しようという事に成りましたので、美代吉に悦おほばせ
る心算つもりゆえ大めおおかしで、其の頃散髪ざんぎりになりしましたのは少なく、
明治五年頃から大して散髪ざんぱつが出来ましたが、それでも朝ちようしん臣しん
た者は早く頭髪あたまを勧められて散髪ざんぎりに成なり立たてでございますが、ま
た散髪に成つて見ますと、この撫付けた姿を見せたいと、惚おぼれ
ている女には尚變つた所が見せたく、黒の羽織しろちりめんに白縮緬へこの兵児
帯おびで格子の外へ立ち、家うちの中を覗のぞきながら小声こゝろにて、
庄「美代ちゃん宅うちかえ」

と声を掛けると、美代吉は庄三郎の事ばかり思っています処へ、
想おもう男に声を掛かけられ、飛立つばかりいそぐしながら、

美「あい」

と立上るを引き止め、

婆「何だよ、お止しよ、お前お客様が来て入らつしやる処で、藤川さんだろう、止しなよ、お客様が入らつしやるから余計な事を云いなさんなよ、出なくつても宜いんだアね」

新「お母さん宜いじゃアないか、前に鬘肩で呼んでくれたお客なれば、今美代ちゃんを請出せば私の妹分にも為ようと思つている、その妹を鬘肩にしてくれたお客なら私もお近付になりたいから、お上げ申した方が宜い」

美代吉は逢いたいと思う処へこう云われたから、

美「はい」

と直すぐに二畳の上あがり口へ出て来まして、障子を開けるとて格子の

外に立つて居まする庄三郎を見て、莞爾にっこと笑いながら、

美「おや宜くおいでなさいました」

庄「今日はね、少しお前に悦ばせようと思つて来ました。」

美「余あんまりおいでなさらんから何うなすつたかと思つてましたよ」

庄「なにね深川の方の知己ちぎの処に蟄息して居たが、遠えん州しゅうの親

族の者が立歸つて来て、何か商法を始めようと思ふのだ、それに

就いて蠟かき売がらちよう町よに宜い家うちが有るから、その家を宿賃かりで借る積もりで、

品は送つてくれると云うから、その家で葉茶屋はぢややを始める事になつ

たので、実は母おふくろ親おふくろに打明ぶちあけました、云い難にくかつたが思い切つて、

実は斯これ々くの芸妓げいぎが有りますが、あれは腹から芸人げいじんじゃア無い事

は会津藩えつしんの斯々これという者の娘むすめでと、すっかりお前の身の上みづかみを明し

た処が、そういう身柄の者なら宜しい、何うせ一人嫁を貰わなければならんから、早く儲けて金が出来たら、お前を貰うように約束して置くが宜いとまでの話になったから、お前に悦ばせようと思つて来たのさ」

美「それはまあ嬉しい事……種々いろくお話も有りますから、ちよいとお上んなさいよ」

庄「お客かえ」

美「なに私わちきのお父さんと心安い人なんで、四五度私たびを呼んでくれた人ですが、宅うちのお母さんと近付に成りたいって来てえるんですよ」

奥から声を掛けまして、

新「何方どなたですか此方こちらへお上りなさい、お客でも何でも有りませ
 よ、親類のもので………おい師匠お前ちよいと彼のあお方を此方こつちへ」
 三「へえ………先此方ますこちらへお上りなさいまし、一切親類付合で、今ち
 よいとお酒が始まった処で、これから美代ちゃんのお兄あにいさまにな
 るお方で、へへ、何うぞ此方へ入らつしやいまし………へえ何
 うも是は玉柄たまがらで、このくらいなステッキは有りませんな、何う
 も一切違いやすね………さア此方へく」
 庄「はい何方も暫く………えーお母つかア誠に御無沙汰をしましたが、
 少し訳が有つて深川の方に引込ひっこんでいたので、存じながら御無沙
 汰になりましたが、今ちよいと御近辺まで参つたから、お訪ね申
 しましたが、生憎あいにくな処へ来てお邪魔をしました」

婆「え、お茶を上げな……あなたにも此の娘が度々御鼻屑で呼んでおくれなすつた事も有りますが、明後日から美代吉は宅にいませんよ、こゝに入らっしゃいます美土代町の洋物屋の旦那様が身請をして下さいますので、こんな子供の様なものでございませぬ、可愛がつて身請して下さい、大金を出して引かして下さい、貴方のような何じや有りませんが、随分中には風のお客が、玉の五つ六つも付けて祝儀の少しも出すとね、上手へでも連出して色男振って、ほんとにあなた然うじゃ有りませぬか、私も心配した事も有りますよ、明後日からおいでなすつた処が婆アばかりで面白くも何とも有りませぬよ」

と云い放たれ、庄三郎顔の色を変え、

庄「むゝ左様か…」

と云つたぎり、ぐいと癩癬かんべきに障りました、これが奥州屋新助の大難と相成ります。

三

藤川庄三郎は、あれ程深く云い交して置きながら、身請をされるところに今まで一言の言葉もなく、手紙一本送らんで、無沙汰に身請をされるといふは不実な女だと思ひますと、そこは旗下の若様だけ腹に据兼ねすえか、ぐいと込上げて来ると額ひたえに青筋が二本許りばか出まして、唇がぶるゝ震え出し、顔の色を少し変え、息遣いも

荒く、

庄「お母^{つか}ア、何も然^そんなに云わないでも宜^いい、余^{あん}まり久しく無沙汰になったから訪ねたのだが、お客様が入らっしってお邪魔になつたら帰りますよ、何も然^そんなに薄情な事を云わないでも宜^いい：美代吉お前^{めえ}が身請になる事は少しも知らなかつたが恐悦だねえ」美「あれさ身請たつて、まだ今話があつたばかりで決りもしないのに、あんな事を云つて」

庄「なに宜しい、まことに恐悦だ、洋物屋^{とうぶつや}だか乾物屋だか知らねえが、誠に結構だ……何^{どなた}方も甚だ失敬」

新「まあ宜しいじゃアございませんか、お母^{つかあ}の云いようが悪いから誰でも怒^{おこ}らア、美代吉種^{いろく}々是には話の有る事だから、後^{わし}で私

から話をするから、お前往つてあの方の機嫌を直して帰すが宜い」
美「はいく」

とおどくしながら庄三郎の出かゝる上り口まで参りまして、

美「ちよいと藤川さん」

庄「なぜ出て来た」

美「出て来たつて今身請の話が始まったばかりで、何だか訳も解らないのに、あんな事を云つて、色でも恋でも有りやアしませんよ、私のお父さんを歌俳諧の交際つぎあいで知つて居るから、身請をして妹分にして、松山の姓を立てさせて遣り度いつて今話があつたばかりなんですのに、気前きぜんを悪くして腹を立ててはいけませんよ」
庄「なに僕は悪い処とこへ来ましたよ、他の芸妓と違つてお前は会津

藩でも大^{たい}禄^{いろく}を取った人の娘だから、よもや己を騙^{だま}すような事は有るまいと思つたから、一昨日^{おと、い}母にも親族にも打明^{ぶちあ}けたのは僕が過^{あや}まりました、お前はよく今まで己を騙したね」

美「騙す訳も何も無いんです、今急に身請の話が出たのですもの」
 庄「身請に成るなら本当に手紙の一本位よこしてもいゝんだ、もう親族にまで打明^{うちあ}け、此方^{こつち}で身請をしようという話がつけば何^どの位金を出すか知れんが、手前^{てまい}だつて親族も有るからそれだけに為^しねえことはない」

婆「何だえ、その音は、何うしたんだえ、そんなに機嫌を取るから悪いんだ、機嫌を取りやア宜^いい氣になつて、色男振りやアがつて、人の家^{うち}の娘を打^ぶつたり叩いたりしやアがる、全体おかしな奴

だ、他人の家へつかく這入って、お茶ア飲んで菓子を喰倒しやアがつて、ほんとに風の悪い奴だ」

新「師匠美代ちゃんが泣いて居るから見て遣んなよ、お母の云いようも悪い」

三「旦那御心配なさいますな、彼じやアちよいとグーツとちん／＼が込上げて来ます、ぽかりとステツキで打つたんでげすが、本当に素敵もないことで」

新「ムン何んだ洒落どこじやアねえ……美代ちゃん泣いたつて仕様がない、こゝへお出で、泣かないでも宜い、藤川さんだろ、聞いて知つて居るから後で兄さんが挨拶を……今から兄さんと云うのは可笑しいが、会つて話をすれば、屹度藤川さんの心持

も解けようから」

婆「なに宜い、あんな者に上手を遣うからいけねえ……あなた本
 当に此の娘はお客の前へ出るとはらくする性質でいけません、
 あんな小悪らしいぎすくした奴は有りません」

新「お母さんの云いようも悪かったよ……お前泣いたりしちやア
 いけない、ムウ大層降出して来たな、雨の音が聞えるが、こいつ
 ア困ったな。浜まで明日往くにしても、帰らなければ都合が悪い
 から、人力を一挺云付けておくれな」

婆「はい……併しまア宜いじゃア有りませんか」

新「いや少し頼まれた事も有るので、是非浜へ往って買物を為な
 ければならんから」

婆「然^そうでございますか、それじゃアはるや、大急ぎで車を逃^{あつら}え
なよ、仕立は高いから四つ角へ往つて綺麗^{ほろ}そうな車を見つけて来
な、幌^{ほろ}の漏らないようなのを、大急ぎで早く往つて来な」

下女「はいく」

と下女が有松屋と云うぶら提灯^さを提げて人力を雇いに往^いきます
と、向うからがたくく帰り車と見えて引いて参るを見付け、

下「ちよいと車屋さんく」

車夫「へい」

下女「あの神田の美土代町まで幾許^{いくら}だえ」

車夫「へい一朱と二百で」

下女「高いよ、そんな事を云つたツて余^{あん}まり高いよ」

車夫「高いたつて降つて来ましたから」

下女「降つて来たつて、お負けよ、一朱ぐらいに」

車夫「へエ何うでも宜うございます」

とフランクettetを身体に巻付け、ずぶ濡になつてゐる車夫が、

下女の後からびしよく附いてまいる所を、藤川庄三郎は丁字風

呂ぶろの蔭かげに隠れていたは、愚痴な女に男の未練で、腹立紛れに美代

吉を打ぶん殴つて出たが、まだ腹が癒えず、何うも身請をされては

男の一分ぶんが立たんと、旧もとの士族さんの心が出ましたから、小蔭に

隠れて様子を立聞くと、奥州屋新助が美土代町へ帰るようだから。

庄「ムウ彼奴あいつが美土代町へ帰るならば宜しいたゞア置くものか」

と煙管筒きせるづつに合口あいくちを仕込んだのを持って居ます。今新助が車

に乗る様子を見ていると、表までどろ／＼送り出し、

皆々「左様ならば、左様ならば」

婆「何うぞ明後日あさってはお待ち申して居りますが、何時頃なんどきごろおいでにな

りますか」

新「二時頃には来る積りだよ」

婆「是非おいでを……ちやんと掃除をして置きまして、皆子供みんなた

ちにも話を致して置きます、左様ならば御機嫌宜しゆう……車くるま

夫やさん気を附けて成りったけ早くお頼み申しますよ」

車夫「早くたつて歩くだけにしか歩けません」

婆「人の悪い車夫だよ、ぶらく／＼歩かれちやア仕様がない」

車夫「そんなに急がなくなつても車が廻るから自然ひとりでに往いかれるん

で」

婆「それじゃア車を引くのじゃアない、車に引かれて往くのだ」
 新「そんな野暮なことを云うな……ムーン破けてるひどい前掛だ
 なア、愛敬の無え車夫だね……車夫さん幌は漏りやアしないか」
 車夫「大丈夫で」

と是から梶棒の先を掴まえて慣れない奴が持上げて、ごろく
 引出したが、何うも思うように走りません。

車夫「はいく」

幾らか頂戴したら早く引きますと云わぬばかりに故意と鈍く引
 出し、天神の中坂下なかざかしたを突当つて、妻恋坂つまこいざかを曲つて万世橋よろずばしか
 ら美土代町へ掛る道へ先廻りをして、藤川庄三郎は、妻恋坂下に

一万石の建部内匠頭たてべたくみのかみというお大名が有ります、その長家ながやの下に待つて居ましたが、只今と違つてお巡りさんという御役が有りません、邏卒らそつとか云つて時々廻る方かたが有つた時分で、雨はどつと降出して来ましたから、往來はぱったり止つて淋しい秋の雨で、どん／＼降る中をのたく／＼やつてまいる所を、待伏まちふせをして居りました庄三郎が、いきなり飛出して提灯を斬つて落す。

車夫「あッ」

と梶棒を放して車夫くるまやが前へのめつたから、急に車の中から出られません、車夫は逃げようとして足を梶棒に引掛ひっかけ、建部の溝みぞの中へ転がり落ちる。庄三郎は短刀を振翳ふりかざし、

庄「覚えたか」

と突掛けて来ますると、覗ねらい違たがわず奥州屋新助の脇腹へ合口を突とき通すという一時いちじに手違てがいになりますお話でございませぬ、一ちよつ寸と一息継つぎまして後あとを申上げましよう。

四

えいさわたくして私わたしは夏休うちみの中、相そう州しゅう箱根から京阪の方へ廻まわつて、久しゅう筆記を休んで居りましたが、申まを続つきの美代吉庄三郎の身の上、奥州屋新助の事が大分に後あとが残のこつて居りますこれは明治四年のお話でございませぬ。明治四五年頃は御案内の通り頓とんと未だ開ひらけない世の中では有りますが、漸ようやくに明治五年に此この散髪さんぱつが流は行や

りまして、頭を刈る時にも厭がつて年を老つた人などが「何うか切りたく無い、切るくらいなら、寧そぐり／＼と剃こぼつて坊主になつた方が善かろう」それを取ツ攫まえて無理に切るなぞという、実に厭がりしましたものであります。ところが只今では切らなければ恥のような訳で、実に昔切り立てには何故いやな彼んな頭をするか、厭らしい延喜のわりい、とよく笑いましたものであつたが、散髪が縁起が悪い頭だか、野郎頭の方が縁起が悪いのかとんと分りませんが、先達て博識の方に聞いたら、前を剃りましたのは首実検の為に剃つたので、大将へ首実検いたさするに指を髻に三本入れた時に（右の手にて攫む）斯う髻を取つて大将の前に備える時に死顔が柔かに見える、前が剃つて有ると又髻

を掴つかむにも掴み易いと云うので、前髪まええを剃上げて見せたというこ
 とだから、以前せんの頭あたまは余り縁起よの好い頭じゃアございませぬ、首
 実検いとびんやつのための頭だと云います、それから追々剃りまして糸鬢いとびんやつ
 奴こが出来ましたが、清元きよもと本多ほんたと申して幫たいこもち間まやなんかは石
 垣いもとほに蜻蛉とんぼの止つたような頭に結むすびましたもの、只今では散髪さんぎりに
 成つたから、風ふうの変え様が有りませぬが、此方こちら（右）に曲まげるとか、
 或あるいは左の方に撫付けたが宜よろかろう、中央まんなかから取つて矮鶏ちやぼの尾おしりの
 様なりな形かたちに致いたして粹すいだという、團十郎だんじゅうろう刈かりが宜よろいとか五分刈ごぶかりが彼あれ
 が宜よろしいと、粹いきな様さまだが團十郎だんじゅうろうが致いたしたから團十郎刈だんじゅうろうかりと云うと、
 大層名おほなまが善よいが、よくよく見れば毬いがくり栗坊主くりぼうずだから悪く云つたら
 仕方の無いもんだが、あれが流行はやりと成ると粹いきに見えます。今では

前の方にばらりツと下さがつたのが流行ります、あれはまア乱れて下つたのかと思うと結かみいどこ髪床あつらでの誂あつらえです、西洋床の親方なんぞは最もう心得て居りますから、先方むこうから、

床「どの位に………」

客「前の方に五十六本」

なんて申したつて分りません、仮令たとえ長く下げまして、末には目の上にまで被かぶさつて、向うが見えないように成つて、向うから人が来て、

甲「今日こんにちは」

乙「へい（髪を両手にて搔か上げ右左かえりみと顧みる）え、何方どなたです」

なんてえ訳で、両方の手で分けて見たり何なんかするのは可笑おかしゆ

うございですが、其の頃は散髪さんぎりに成つても洋服を召しても、未だ懐中ふとこには煙管筒きせるづつの様にして、合口の短刀を一本ずつ呑んで居おつたもの、されば徳川の禄を食はんだ藤川庄三郎、ことには若様育ち、あれ程にまで云いかわし、惚れた美代吉を身請をされては何うも友達へ外聞が悪い、親や親戚に打明けて身請までにと思つた処を他たへ買取られては一分いちぶん立たん……と云う血気にはやつて分別も無く、妻恋坂下の建部内匠頭の窓下に待つて居るとも知らぬ奥州屋新助が、十九ヶ年振りで真実まことの妹いもとに遇あひ何うか身請をして松山の家を立てさせて、思う男の藤川庄三郎に添しやふわしてやりたいと腹いらくで種々いろくに考あえて、明後日あさつては身請をする心持で車夫しやふを急いそがしても、車夫くるまやは成りたけのろく挽ひいて、困ると酒手が出た

らそれから早く挽こうという、辻車は始末にいかない。幌が少し破れて、雨がぼたりくと漏ります。梶棒の尖端とつさきを持つてがたく揺ゆるがせて、建部の屋敷裏手までまいると、藤川庄三郎曲り角の所から突然だしぬけに車夫しやふの提灯を切つて落した。車夫は驚いて、どんと筋斗もんどりを打つて溝の中へごろりと転がり落ちましたが、よい塩梅あんばいに車かえが反りません、機はずみで梶棒が前に下りたから、前まえど桐油うゆを突き破つて片足踏み出すと、

庄「思い知ったか」

と組附くように合口を持って突ツ掛りまして、ちようど奥州屋新助の左の脇腹のところをぶつうりと貫いた。

新「うゝん」

と云いさま、此方も元は会津の藩中こちら松山久次郎まつやまきゆうじろう：聊か腕いさゝに
 覚おぼえが有りまするから、庄三郎の片手を抑おさえたなり、ずうんと前
 のめり出し。

新「暫くく逸はやまつちやア成りませんぞ」

庄「なに宜く先程は失敬を致したな、一分いちぶん立たんから汝てまいを殺し、

美代吉をも殺せつがい害して切腹いたす心得だ」

奥「暫くく何うぞ……逸はやまつた事をして下されたなア藤川氏
 ……手前は美代吉の色恋に溺れて身請を致すのではござらん、美
 代吉の真実の兄で松山久次郎と申す者でござるぞ」

庄「へい、なに松山……美代吉の兄とはそれは又何ういう訳」

奥「フムそれは……まだくく……あッあ斯かく成ゆり行くは

皆みんなな不孝ぼくちの罰ばちである……手前てまい二十四歳の折に放蕩無頼で、元の会津の屋敷を出る折に、父が呆れて勘当を致す時に一首の歌を書いて、その短冊を此の久次郎に渡された……それより青森へ参つて、北海道へ渡つて、暫く函館地方に居つたが、時治まつて横浜に出て参つて只今では聊か活計の道を立て……これから僕も世に出ようという心得であつた……先達さきだつて五六度呼んだ美代吉が、何となく温順おとなしやかな身柄の宜しい者である、武士の娘と云う事を聞いたが、時世ときよとて芸者の勤め、皆な斯様に成り果てた者も多かろうと存じて……手前てまえ妹と知らず、鼻屑はなづけにして五六度呼びました……すると美代吉はあなた様と深く云い交してある事を他たの芸者から聞きましたゆえ、何うぞして配あわして遣りたいと、今日

美代吉の宅たくへ参つてふと見たる屏風の貼はり交まぜ、その短冊を見れば、
 父が勘当の折に書いてくれました自筆の……歌でございます……
 その短冊から段々問い合せますと、松山久馬の娘である、父も
 兄も相果て、母が病中斯様な処に這入つて芸者を致すとの物語を
 聞き、あゝ己は不孝で、二十四歳の折家出をして、両ふた親おやに聊か
 も報おんがえし 恩を致さんで、年はもいかぬ女の身で斯様の処へ這入つ
 て芸者を致して居いるか、如何にも不便ふびんな事であると存じました故
 に、何うぞ美代吉を身請致して別家を為し、松山の名み跡よを立
 てさせたい、殊ことには貴方様と何うか御相談の上で、不束ふつな妹で
 は有るが、女房にようぼに持つて貰もらいたいと存じて、今こん日にち身請を致し、
 明後日みょうごにちは貴方様をお招き申して、何うぞ妹の身の上をも善よきに願

おうと心得て居ったところが、貴方様がお出でになつても、有松
 屋の婆ばあおが居るから何一つ御相談も出来無い、貴方が思い違いを致
 して御腹立ごふくりゆうでお歸りの時も、私わしは心配して居つたが、まさか手
 前に、はアツはア……：斯様な荒々しい事をなさろうとは思わな
 かつた……：併しかしそれ程までに妹を思召おほしめして下さる御心底ごしんていはア
 ツはア……：誠に忝かたじけない、手前てまい此処こゝに金きん円えんを所持おして居る……
 此の五百円の金を差上げるから、わが亡ない後あとに妹をお身請なされ
 て、他ほかに親戚みより兄弟も無い奴と何うかお見捨て無くはアツはア……
 末々まで女房に持つて遣つて下さるように願ねがひたい、こゝきんに金が
 有るからお渡し申す……：エお分りに成りましたか」

聞きく事ことごとに庄三郎、

庄「はあア左様な事で有ったか」

と。只茫然といたして、どつどと降る中にべたくくと坐つた。

庄「左様とは心得ませんで……どうも誠に失敬（失敬たつて殺しまつては間に合いませんねえ）何うかお助かりは……」

奥「えいや助からん」

と苦しい中で懐から金かねを取り出し、

新「……五百円、それに此の金きん側がわの時計も別して記しるしのある訳で

ない、お持もちりよう料りょうになされて下さい、他ほかの物は記しるしが有りますから

……此処こゝにあなた様が居ると、もし夜廻りの者が参つては相成りませんから、お早く往つて、何うぞ早く往つて下さい……急に

お身請になると感付かれると成りません、一二ヶ月経つてからでございませぬ、お早く〜」

早く〜という声も最う息も急せわしゆうなります様子。此の頃は巡査という役もございませぬけれども折々は邏卒という者が廻りました時分で、雨は降りますけれども妻恋坂下、何う成るか此こ方も怖いのちらに心急こゝろせくから、其の儘に藤川庄三郎は、五百円と時計と持つて御成街道おなりかいどうの方に参りますと、見送つた新助は血のりに染つたなりひよろ〜出て、向うの中坂下なかざかしたについて、あの細い横よこちよう町まちの方に参り、庄三郎に突かれたなり右の手を持ち添えて、左から一文字にぐうツと掛けて切つた、此方こつち(左)の疵きず口ぐちから逆さかに右の方へ一つ掻切かつきつて置いて、氣丈な新助、咽喉のどを一つぷつ

うりと突いて倒れました。左様なことは些ちつとも知りませんのは奥州屋新助の女房、昨夜は新助が帰らんと云うので、

女「旦那さまがお帰りが無いから、早くお前店を開けて、万事氣を附けておくれ」

福松ふくまつという店を預かっている若者が指図をして、店の飾り附

をして居ると、門口へ来ました男は穢きたないとも穢きたなく無いとも、

ぼろくとした汚れ切った毛けつとう布を巻き附けて、紋羽もんばの綿頭巾を

被つて、千草ちくさの汚れた半股引を穿はき、泥足草鞋わらじばき穿の儘洋物屋

の上り端あがはなに来て、

男「御免を蒙こうむる」

福「今其処そこへ来ちやアいけない……来ちやアいけない……今店を出

す処だに、何だい」

男「何だつて人間だい」

福「冗談云うねえ、今店を明けたばかりの処で其処へ突立つて邪魔して居ちやアいかん、何だア錢貰い」

男「失敬極まる事をいうな……これ錢貰いとは何だ……さ自家の家内に逢いたいんだから是れへ呼んでくん……おふみを是れへ呼べ」

福「何うもこれは何だろう……お前は一体何処どこのものだい」

男「何処も何もあるものか、人力車夫の徳藏とくぞうという者だと云やア解るから呼んでくれ」

福「呆れて物が云われない、何だつて車夫くるまやが此処に来てお内儀かみ

さんに逢いたいてえのは何ういうわけだ……何ういう縁故をもつて云うのだ」

徳「縁故の無い処に云うものか、当家のふみと血を分けたお兄あにいさままで大西徳藏という者だと云やア分る」

福「は、あ是れが兄貴のわんちゃん者だ」

と番頭も分りましたから、

福「今お内儀さんはお加減が悪くて寝やすんで居ります……誠におあいにくさま生憎様で」

徳「なにお生憎様てえ事が有るものか、塩梅が悪きやア奥へ通つて逢おう、盥たらいへ水を汲んでくれ、足を洗うから」

福「困りますナ何うも、今何うも店の処じやア困りますからよ、

暫くお待ちなすつて」

徳「待たなくてよ、逢いに来たんでい」

というに仕方が無いから、番頭は奥に往きますると、乳ちのみご児に乳を含ませて、片手で其処此処片付けて居りました。

福「申しお内儀さんえ」

ふみ「はい」

福「あなたのお兄あにいさんで徳藏様が」

ふみ「あゝ又来たかい」

福「へいぼろくしたお装なりで……あなたの前で申上げては済みませんが、実みなりにひどいお服装ごしゆ、御酒の上の悪いてえことを聞いて居りますが、私わたくしは存じませんから、何だかと思つて、錢貰いなら

アノ店を明けたばかりだから、其処へ立つちやアいけないと云つたら、あべこべに劍突けんつくを食つて、兄上いもとが妹に逢うのだと申しませんが、御様子が悪いから……」

富「あの店に置いちやア困るから、台所で逢うから此方こつちへ呼んでおくれ」

福「へい……貴方さまお内儀さんがお目にかゝりますが、足を洗うのも始末が悪うございますから、裏からお這入りなすつて……直すぐに其の蠟燭屋の裏をお這入りなされると井戸の前の処が入口でげすから」

徳「いや店から上つて悪いという次第もないけれども、併しながら何処から上つても五分だ……大層代物しろものが店に殖えたな」

福「何うもまことに仕入が間に合いませんで」

徳「なんだア、汝てまえなんどは生利なまぎきに西洋物を売買うりかいいたすからて

えんで、鼻の下に髯ひげなんぞを生はやして、大層高慢な顔をして居ても、碌になんにも外国人と応接が出来るといふ訳じやアあるめえ」

福「そんな事は兎も角も、お内儀さんがお目に懸るつてますからお早く」

徳「あゝうい此家こちらア裏ア何処だ……裏ア」

ぱたりくと此方こちらの羽目に打突ぶつかり、彼方あちらの壁に打突かつて蠟燭屋の裏に這入り、井戸端で。

徳「此処か、奥州屋の新助の宅たくは此処かな」

ふみ「お芳よしや、そこ開けて遣つておくれ……此方こちちだよ、此方へお

這入りなさい……あらまア穢なりい服装でマア、またお出でなすつたね」

徳「又だア……其の後は打絶うちたえて……御無音ごぶいんに……何時も御壯健

おかわりも無く……大西徳藏大悦奉たいえつる」

ふみ「何だね困りますね、朝からお酒を飲んで、お前さんは始終は身体を仕舞いますよ」

徳「何うせ果は中風よいくだ、はゝゝだが酒が一滴も通らなけりア口

の利けねえ徳藏だ、予てお前も知つてる通りのことだ、前々勤務まえくつとめ

をしている時分にも宜しく無いから飲むなてえが、飲まんけりア

耐たまらん、殊更寒い昨夜ゆうべは雨が降り、斯かくの如く尾羽打枯おはうちからして梶棒

に搦つかまつて歩るいたつて、雨で乗手が少ない、寒くつて耐らんか

ら酒を飲むと、自然と車の輪代はだがたまつて、身代もまわりかねる
 ような事に成つて、はゝゝ如何んとも何うも進退谷きわまつてね、誠
 に濟まんけれど金え拾両ばかり貸してくれ」

ふみ「何を……判然はつきり仰しやい」

徳「金を十両拝借致し度たいという訳だ」

ふみ「私の処にお金を借りに来られる訳じゃア有りますまい」

徳「訳が有りア謝つて来やしねえ、訳が少し無いように成つて来
 たから止むを得ず只誠に重々恐れ入つて、拝借を願うというよう
 なマア訳だね」

ふみ「はアお前さんは私とは縁が切れて居ますよ、最う此方こつちへ私
 の籍を送つてしまえば、奥州屋の者でございますから、兄きょうだい妹

でもお前さんに私がお金を送る訳は有りませんが、今までに二十四度^{たび}お貸し申したよ」

徳「心得て居ります、再度拝借致しました、併し^{しか}現在の兄が倒れんとするを救わんというのは何うも道に違つて居る、そりやア縁は切れて居ろうが、血筋は切れん、その何うも兄弟の間柄でもつて、他に兄弟の有る訳じゃア無え^ね……重々悪い此の通り（平伏）此の通り恐れ入つて居る」

ふみ「何うぞ、お前さんも峯壽院^{ほうじゅいん}様の御用^{ごようたし}達では無いか……：お前さんは立派な天下の御家人では無いか、お父^{とつ}さんが亡くなると蔵宿^{くらやど}は借^{かり}つくし、拝領物まで残らず売つてしまつて、お母^{つか}さんもそれを御心配なすつて、あの通りお逝去^{かくれ}になりました、私

より他に兄きょうだい妹いは無いと仰しやいましたけれど、大切な兄妹と
思つて下さるかは知らないが、其の同胞きょうだいをお前さんは騙だまして
横浜に連れてつて外国人のらしやめに仕ようとした事をお忘れ
なすつたか、私が二十一の時だよ」

徳「まことに何うも重々相済まん」

ふみ「貴方は外国人は汚けがらしい、日本は日の本もとだ、神の国だ、

外国の人などを入れるなという日光様の教えもあるものを、背い
てこんな事をしたからと、自分の情なまけもの者よそを余所いっにして、毎いっもあ
んな事ばかり云いながら、その汚れた外国人のところいもとに一人の妹
をらしやめにするとつて、私を横浜に置去りにして、五十両の
手金を持つてお逃げなすつた事をお忘れなすつたかよ」

徳「いさゝか覚えて居りますな……重々相済まん、何うも仕方が無い、借財で仕方が無えよ、借財でなア」

ふみ「私はお前に置去りにされて、知らない横浜の富田屋とんだやさんの家うちに泣暮して居ましたよ、処へ富貴楼ふつきろうのお内儀さんが一寸富

田屋さんへ用が有つてお出でなすつて、何ういう訳だと申しますから、是々だつて話をすると、あゝいう気性のおくらさんだから、それはお気の毒だと今の旦那に話をして、私の身体を五十円で買われたようなもの、此所こゝに来て居るといつて、縁切りで来たのだよ、お前さん其の他にも家の旦那はあゝいう気性だから、お前さんに別に又三十両お上げなすつた、もう是切り参りませんと云つても度々たびく来る、それは内証で私も二両や三両の事なら何うにか

して上げたが、何度来ても旦那は会いはしない、お前さんも旦那の顔は知るまいけれども、兄あにさんが借りに来た様子だ、沢山たんとの事でも有るまいから、時々は些ちっと宛小遣ずつを持たして遣るが宜よいとお前さんが這入つて来ると表から外はずして出る、貸して遣れと云わんばかりに親切せつていにしておくんなさる旦那の前に対しても、私はお貸し申す訳には往ゆきません、此の盆前ぼんぜんに来てお前さん幾許いくら持つて往つたえ、二十円持つて往つたらう……其の時もう来ないと云つたでは無いか、その口の下から直借すぐりに来るとは実に私は呆れてしまつた……貸されませんよ」

徳「まことに濟まん、貸されなきやア致し方がない、無いけれども何うも其の日に逐おわられて飯が食えんという事に成つたから、ま

ことに何うも困る……何うあつても貸されんか」

ふみ「借りに来られた義理じゃア有りませんよ」

徳「義理も道も心得ては居るけれども、何うも一向仕方が無い」

ふみ「貸せたつてお前さんには返す方角はなし、お金を遣れば遣る程お酒を飲んで、只怠けてしまふだけの事で、お前さんにお金を上げると態わざと酒を飲ましてよいよいにする様なものだから上げませんよ」

徳「よい……最う是切り来ねええ、ツブ、何うぞ、恐入つた妹いもうと、妹と云つては縁が切れてるから奥州屋新助殿どんのお内儀さんに

対して大西徳藏斯かくの如くだ（両手を突き頭さげを下る）矢張是も親の罰ばちだ、親の罰だから誠に何うも困る、うむ最う己は縁が切れたか

ら己にすると思つてもいけない、親、親にすると思つて……」

ふみ「なにお前さんは親の家を潰うちしてしまつた人だわ」

徳「後生だから」

福「大變大變お内儀さん大變でございます」

ふみ「何だね、仰山な」

福「旦那が腹ア切つたツてえ知らせが……妻恋坂下で旦那が腹ア切つて居るつて、気が狂ちがつたんでしようか」

ふみ「旦那が妻恋坂下で腹、まア誰か往つて見たのか」

これを聞くと徳藏は、

徳「はてな妻恋坂下と云えば昨夜乗せた客ゆうべだが、あれが奥州屋新

助では無いか」

と気が附いたから少し酒の酔えいが醒さめた。

徳「直ぐに帰るから、些ちつと無くてはいけないから、五両でも三両でも……係あり合あひの事が有つて車を置いて来た」

ふみ「何だよ私の家は取込んであるよ困るね、是でも持つて往つておくれ」

と有合あわした小遣を遣り、子供を抱おいたり負おつたり致して、番頭立合で往つて見ると、なさけなき死し様ようだ、常に落お著ちきまして中々切腹する様な人では無いが、何う云う訳か頓とんと分わらない。抛よなく此の事を訴うえますと、検屍事ことずみ濟すになつて死骸を引取りまして、下谷したやの広徳寺こうとくじに野辺送りをする事に成りましたが、誰が殺したか頓とんと知れませんが、是が自然に知れて来ると

云うは、悪い事は出来んものです。一寸^{ちよつと}一息致しまして。

五

え、お話二つに分れまして、数寄屋町の有松屋のお話でござい
ます。芸者屋の商売などと云うものは、外見^{おもて}はずうツと派手に飾
つて、交際^{つきあい}も十分に致し、何処に会が有つても芝居の見物でも、
斯ういう店開きが有れば其の様にびらを貼るといふ様な事でござ
いまして、中々物入の続く商売。殊に暮などは抱^{かゝ}子^{えツこ}を致して
居れば、新しく出^での紋附を染めるとか、長襦袢^{こしら}を拵^ええてやるの、
小間物から下駄穿^{はきもの}物に至るまで支度を致すといふので、大した

金の入るものでございます。婆は少し借財の有る処で身請という

から、先ず是で宜いと喜んだ甲斐もなく、打つて違つて奥州屋新

助は腹を切つて死んだと云うので、ぱったり目的が外れました。

是から歳暮に成りますると少し不都合で愚痴ばかり云つてゐる処

へ、たいこもち 幫間の三八、

三「お母さん今日は」

婆「おやお這入んなさいまし」

三「押詰りまして」

婆「何うも月げつぱく迫に成りました、誠に何うも寒い事ねえ、暮の二

十五日だからねえ、時々忘年としわすれのお座敷なぞが有るかえ」

三「有るにア有るけれども、昔と違つて突然だしぬけに目的あてが外れたりし

て極りが無いから困りますのさ」

婆「けれどもお前などは氣樂で宜いじやアないか」

三「氣樂でも何でも無いのサ、何うも只た一人者でも雇婆アさ

んの給金も払うなが無えんで、勘定というものは何処にも有る

もんでげすが、暮はいけませんねえ、押掛のお座敷に往つても

御祝儀は下さいませんから誠に困りますよ、お歳暮の時などは

御祝儀処か、おやお出でかえ誠に取込んで居るからと云うんで、

無しさ、たいこもち 間^ち などは暮はいけませんア、くるはる 来^る 春を待つ

ですが、お母さんなどは土用が来ても歳暮が来ても福々しいね」

婆「何うして^{おおちがい} 大^い 違^い さ、それに彼の奥州屋の旦那がね、ソレあ

の時お前も落合つて身請つてえから少し苦しい処だから丁度好い

塩梅だと極りがついて、明後日は身請あさつてというから当あてにして、私も

その支度もし、別に抱えも仕たいと思うからそれに当あて箝め、借金も返す約束に成っている処が、ぽかりと外れてしまった実に困つ

たのサ、だがね何うしてあの方があんな死し様しようを為すつたろう」

三「解らないよ、泥ぬかるみ濘ぬかるみへ踏込んでも、どっこい悪い処へ来たと

後あとへ身体を引いて、一かた方の足は汚さねえと云う方だが」

婆「それが何うも腹を切るなんてえのは」

三「なに矢張りやつぱ洋物屋の旦那様でも、元が士族さん様の果はてで、何か

で行詰つた事が有つて、義理堅い方だから義たが立たないとか何なんとか

云う所からツイと遣つたか、それとも人にねえお前いさん好いい年を

して芸者の身請を致して、女房子の有る身からだ分りで了りよう簡けん方がたが違お

うとか何とか野暮な小言を云った奴が有つて、色に溺れるのじゃアない、美代吉の身請を致して、好い亭主を持たせるのだと言つても聞かないで、悪い喧嘩でもしてそう思われたが口惜しいとか何かでプイと腹ア切る氣になつたのかも知れない、それとも腹なんア切るのは容易の事じゃア無え、善よく々思切おもいきつたのであろう、それとも無理な才覚をなすつて美土代町のお宅でも悪借わるじやつきん金………
 ……でもありやアしないかと思われますねえ」

婆「是が為に外れて私わちきは誠に困つて居るが、美代吉は身請が外れて嬉しいと云うような顔をしているのが腹が立ちますわね、此の頃美代吉は外れてから元氣が出たよ、あゝ、いう分らない阿魔つちよだから実に私は途方にくれるんだよ、この暮は本当に困ります

よ」

と噂をして居るところへ藤川庄三郎門口へ立ちました。装なりは南部の藍あいまん万の小袖に、黄八丈の下着に茶献上の帯に黒羽二重の羽織で、至極まじめのこしらえでございまして、障子戸の外から、庄「御免……美代ちゃんうち宅かえ」

婆「はいお兼かねや、誰か来たから鳥渡ちよつと往つて見な……表どなたへ誰方かお出でなすつたよ」

兼「はい」

女中が駈け出して障子をがらりと開けると庄三郎。

兼「おや入つしやい」

庄「まことに御無沙汰（挨拶をしながら）美代ちゃんは」

兼「今何なんでございます、一寸ちよつとお約束で出ました」

庄「お母さんは」

兼「お母さんは居りますからまアお上り遊ばせ」

庄「はい御免なさい」

婆「おい一寸兼や、何だよ、気の利かない女こだよ、藤川さんだよ、

無闇に上げちやアいけねえなア……この節は何うもいけない、

余よつぽど程いけねえ、様子の悪い、それを無闇に上げてさ、居ないと

云えば宜いいに何だね……最上つてお出でなすつたアね……さ

ア（急に笑い顔）此方こつちへお出でなさい」

庄「お母つかあまことに御無沙汰、一寸来なくちやアならんのだけれど

も、駿府の方から親戚の者が出て来て居るもんだに依よつてな何や

彼かやと取とり紛まぎれて、何うか僕も親族の者が、遊んで居てもいけな
 いからと云うので、今度商法をね……当節は兎角商法流行ばやりで、遠
 州の方から葉茶はぢやを送つてくれると云うので、蠣殻かきがら町ちように空家あきやが
 有つたもんだから、それを借りて漸ようやく葉茶屋を開店することに極
 りがやつとついたので、お馴染には成つてゐるしするから、悪い耳
 と違つて善よい事をお聞きかせ申まかしたいと思つてね………参つたが、何
 時もお変りへんりございませんで、次第ついでに月げつ迫おぼく
 婆「まことに押詰りましてさぞお忙がしゆう………おゝそれは結構
 でございますねえ、大分だいぶん皆さんが御商法をなさいますが、仰しや
 るお茶屋だの料理屋しるこ屋色々な事をしても、素人で真似をし
 たのは何うも長持のないもんですね、慣れない事てえものはいけ

ませんよ、士族さん方の御商法は何うも外れ易いものでござい
 すから、貴方も一生懸命にねえ……まア御勉強なすつてお遣んな
 さりア宜しゆうございましょう、生憎あいにく美代吉は居りませんで」
 三八「これは何うも暫く………先達せんだつては失敬をいたしました、
 今という只今貴方のお噂たら〜へ〜へ〜」

庄「いや私こそ御無沙汰致しました、お母さん、少し御相談が有
 って来たんだがねえ、些ちつと申し難にくい訳だから、一寸どんな小部屋
 でも有りア」

婆「御存じの通とおの私わちのちききのこは小部屋も何も有りませんが、何の御
 用でございますか、何うか此処で仰つしやつてねへ〜、何うも下
 さいませんと困りますねえ」

庄「実はお前も知ってる通り、知って知らんふりでお出でだろうけれども、実は僕ア道楽てえものは今迄仕た事はねえが、下谷へ来てから誘われて一度遊んだのが病やみつ付で、其の後はお前さんとこ処の美代吉さんと私は隠れて遊んだ事もある、お前がそれが為に腹を立てて私を寄せ付けんという事も知っています」

婆「そう改まつて仰しやつちやア困りますねえ、何も寄付けねえ訳は有りませんけれども、お前さんも亦、私は遊びましたよ、はい御存じでござりませうが、お前さん所とこの美代吉と隠れて遊んだと仰しやられちや困ります、実はお前さんと美代吉が遊びたいばかりで、それまでは堅い妓こでございましたけれども、お前さんに誘い出されて向島うわてくんだりへ往つてさ、二晩や三晩家うちを明けた

事も有ります、それも宜いけど、あんな人の好い奴だからお前さんと遊ぶにも、お前さんだつて有り余る身代じやアなし、身上みあがりをしたたり、聞けば他で以て高利を借りて、それも是れもまア稼かせぎ人にんのこつたから私は何にも云いませんけれども、考えて御覧なさい、私は玉をいくら取り損そこなつたか知れやしない、それもまア私は何とも云いはしないが、お前さんにそう改まつて御存じだろうと仰しやられちやア、私も困りますよ、はい随分困ります、……知らない振で居ましたが、何うぞ是からは遊んで下さらないように願いたいねえ」

庄「だからお前に苦勞させて済みませんから、何うか多分の事じやア出来ないけれども、母にも打明けて話し、親戚の者にも話し

だが、美代吉はお前の娘という訳でもなし、云わば抱えて流れ込んで居るといふ事を知つて居るが、此の藤川に身請をさせて貰いたいんだ多分の金きんえん円を出せと云つては出来ませんが、何うか身請の処ところを御承諾を願いたい」

婆「へえ、大層お立派な事を仰しやいますね、それは藤川さんお前さんも惚れている女ですもの、身請をしてお前さんの家うちへ女房にして置きたかろうさ、お前さんも矢張旗やっぱりはたもと下の若様、私も母でございますから、成ろうものなら美代吉も惚れているお前さんの処ところへ上げたいがね、昔は安かつたもの、五十両も有れば出来ました、立派な花魁おいらんの身請をしても三百両で出来たがね、それが今は法外の話、五十や六十の目腐れ金がねでは出来ません、相場がね

え何うも誠に申すもお気の毒だが、大した事でございまして、何うしても三四百両のお金がなければお前さん達の何うでも出来る話ではなし、身請をしておくんさいとも云われません、お前さんも美代吉も惚合つてる中だから出来る方かたなら私の方ほうから願おうが、それがそれ何うもはいと云う事も出来ないような訳、何しろ事柄が大きいから」

庄「じゃア四百円お金を出せば身請が出来るの」

婆「左様さ四百円有れば出来ますねえ」

庄「屹きつと度それならば身請をさせて下さるか」

婆「そう出ればまア……夢見ていな……恵えびす比こう寿講の売うり買かいの様な

お話でございますからね」

庄「実はね、母に打明けて話したら、芸妓げいしやの身請は何どのくらいのものでらうというから、先ず三百両ぐらい掛ろうと云つたら実は母も驚いて、昔は五十両もあれば出来たものを大分高いと云つたが、実は斯これ々だと云つたら、まア三百円の金も無いけれども、そうなりや身請をしたら宜かろうと、親族から漸くに少し金策が出来て、実は此処に四百円才覚をして来たんだが、此の金で身請をさせて下されば、今日直ぐに書附かきつけを取替とりかわして美代吉だけを連れて往ゆきたいが御得ごとくしん心かえ」

婆「あれ、あなた本当のお金……」

庄「本当のお金だつて（苦にが笑わらい）」

婆「まア何うも恐れ入りますねえ、まア何うも藤川さん、本当に

あなたまア何うも誠に私やアホ、、、（笑）一寸お音信たよりをした
 位と思つて居りましたけれども、斯ういう忙がしい中で、まア美
 代吉にも私やアいつでもそう云うの、御鼻屑はなぢになつた方へはお前
 書けない手でも文ふみの一本も上げなつてねえ、それが芸者のあたりま当
 然えだと云つて、まア子供見た様な者ですから、遂ついまア存じなが
 ら御無沙汰になつて本当にね、三八はんそう身請に成ればホ、、、
 、、、旧もとが旧もとでおいでなさるからねえ、一寸お話しにさえなり
 やア御親類からお金が四百でも五百でも出来て………：：～
 ねえ」

三「旦那さんの前で急に機嫌が直つたりしちやア私まで一寸面顔かお
 赤あかになるが、まアお芽出度めでとうごす、美代ちゃんがお喜びは何のく

らいでげしようか、実は何うも思う男とは添わせたいので」

婆「本当に私も嬉しいから美代吉もさぞ喜ぶでございましょう：

…、わちき私は斯うなるとね吾が子のような心持がして…：お兼やお茶

を入れな、ホ、ホ、ホ、そうして宜いお菓子を取つて来な」

ば、あ、あ、あ、と婆は直に機嫌が変りました。是から庄三郎は忽ちたちま四百円で身

請をして連れて帰る。強こわめし飯を云附けて遣り、箱屋や何かにも目

立たんように仕着しきせは出しませんけれども、相応の祝儀を遣りまし

て、美代吉を引取つてまいる。これから母も得心だから蠣殻町へ

店を借受けまして、駿府から葉茶を引いて、慣れん事だが又慣れ

た者が附きましたして、活計も何うやら斯うやら容易に立ちまするよ

うの事に成つた。親族も善よい縁類も有るから少し足りないからと

云えば是れへ往つて才覚も出来る、女房も持つてるから融通も附
きますと云うので、仲なかよ好く其の年も経ちまして、翌年九月までと
云うものは極愉快ごくにして暮していたが、唯心たゞに絶えぬのは新助の
事です。兄新助のお金で私わしは斯うやつて身請をして、思う女と夫
婦に成つたが、美代吉は知らずに居る事の気の毒さよ。ちようど
四日が命日だといふので、毎月四日の日には自分で香こう花はなを手向たむ
け、仏壇に向つて位牌は無いけれども、心うちの中で回向えんこうして居る。
九月四日は最もう一周忌の命日でございますゆえ、

庄「おいお美代」

美「はい」

庄「今日はお茶の御飯ごぜんを炊かないか」

美「お茶の御飯は私きらいや嫌、赤のお飯まんまをお炊きなさいな」

庄「まあ今日はお前めえを臍へらにしてくれた美土代町の奥州屋さんの
丁度一周忌の命日で、此の間美土代町を通つたら彼処あそこの家うちは變つ
てしまつて今は乾物屋になつた、此処こゝに洋物屋とうぶつやが有つたのだと
思うと、余あんまり善いい心持のものでも無い、おいらも一度でも遇あつた
のだから、志だから水菓子でも取つて仏壇へお茶でも」

美「きまりだよ、お前さんは奥州屋さんのことをおかしく云う
けれども、私わちきが何も奥州屋さんと交情わけでも有りはしまし、あの
旦那だつて私を色恋で何う斯うという訳ではなし、何かお父とつさん
と歌のことで仲好くして、世話にも成つた事があるから、身請を
して遣らうと云つた時に、お婆さんが彼あんな事を云つたもんだか

ら、お前さんも訝おかししく思いなさるんだが、私わたしや本当に奥州屋さんばかりは何にもいやらしいことは無いの」

庄「いやさ、いやらしい事が有る無しじゃアない、たとえ何もなくても一度でも呼ばれたお客が死んだと云えば、その命日には線香の一本ぐらい上げるのは、たとえ芸者でも其そこ処こが人情じゃアないか、今日は兩人ふたりで彼あの人のお寺詣りをして遣ろうじゃアないか、こうとくじ広徳寺へ往つて」

美「広徳寺というのは彼の人のお寺、あんた能よく御存じで、何うして知つて居るの」

庄「な、なに此の間わ他きで聞いたのだ、一寸志だから」

美「厭いやだアね、人：たった五六度呼たばれたお客の死たんだ度んにお寺

詣りするくらいなら、毎日お墓詣りをして居なければなりやアしない詰らないじゃアないか、お止しなさいな」

庄「お前めえのお母さんのお墓参りをして、歸りに上野の彰義隊しょうぎたいのお墓参りをして、それから奥州屋さんのお墓参りに、遊びながら彼方あつちの方へぶら〜と一緒に往いきな、菊時分だから人が出るよ」

美「まだ大變菊には早いじゃアないか」

庄「今日は紋付だよ」

美「いやだよウ一寸何だねえ」

庄「そうでないて事よ、往いきなよ、お前めえもお母様つかさんのお墓参りに

往くのなら、紋付の着物であらたまつて、香花を手向るのがあたり当

前まえじゃねえか」

と無理に紋付にさせるのも庄三郎心有つての事です。此方こちらのお美代はそんな事は知りませんが、亭主の云う事故ゆえ仕方なく紋付を着て。此の節は滅多に着ることが有りません、久しぶりで紋付を着て上等帯を締め、大きな丸鬘わがづくになでつけまして、華美はでな若粧り、何うしても葉茶屋のお内儀かみさんにいたしては少し華美こしらな拵こしらえ、それに垢抜けて居るから一寸表へ出ても目立ちます。これよりぶら／＼遊歩を致して母の墓参りをして、上野を抜けて広小路ひろこうへ参り、万円山まんえんざん広徳寺に来て奥州屋新助のお墓へ香花を手向けて、お寺には縁類の者であると云つて附つけとゞけ届つけを致し、出て来ますと、ぽつ／＼と秋の空の変わり易く降り出して来ました。

庄「困つたな降つて来たよ、何処かへ往つてお飯まんまでも食べて雨を止めようじゃ無いか」

美「出る時は降るだろうと思つたから、蝙蝠傘こうもりがさだけは持つて来たが、沢山たんとの降りも有りますまいか」

と夫婦で車坂の四ツ辻まで来ますと、後あとから汚ない車夫くるまやが、

車夫「えゝ若もし旦那え、帰り車でございますから、お安くお幾許いくらでも宜いいんですが……へい何方どちらで、日本橋の方へお帰りですか、日本橋なれば、私わたしも彼方あっちの方へ帰るんですが何方どなたなんですか、四ツ谷の方に、へえ私わたしも牛込わたくしの方へ帰りでげすが」

何処へ帰り車だか分らない。

庄「まあ宜いい、車が汚いから、あゝ大變に降つて来た」

美「わちき私は久ひさし振ぶりですから長ちようじや者まち町の福寿庵ふくじゆあんへ往つておらい

さんに逢つて、義理をして往ゆきたいんですが、帰りに他家ほかへ寄つ

てお飯まんまを食べるなら、福寿庵へ往いつて遣つておくんなさいよ」

庄「あゝお前の世話になつた以前もとの御用達の福田か」

美「あの旦那は大層立派に暮しをなさつたそうだが、今では御亭

主が料理屋を」

庄「おいゝ若わけいし衆しゆさん、あの長者町の福寿庵という汁粉屋な、

彼処あそこでお飯を食べて、それから蠣殻町へ帰るんだが、少しの間待

つてるようなら御飯おまんまぐらい食わしてやるが」

車夫「えゝ何うも有難うございます、まるつきり今日は溢あふれちま

つて、空からア挽ひいて帰るかと思つていた処で、何うか幾許いくら待つても

宜しゅうございます、閑でげすから、お合あいのり乗でへい、少し（空をながめる）なんでげすが大した降ふりも有りますまいから、幌は掛けますまい」

フラン毛布けつとを前に押付けて、これから福寿庵の前に車を下おろします。車から出て板橋を渡つて這入りますと、奥に庭が有りまして、あの庭は余程手広てびろで有りまして、泉せんすい水がございます。その向うに離れ座敷が所々に有りまして、客をしますので、馴染のことでございますから。

妻「まあ、美代ちゃん誠にまあ久しく、いつもお噂ばかりして居たの、好よく……おやそうお寺参り……私もね一寸お尋ね申したいと思つても、御存じの通り一人ひとりからだからだで、皆みんなな私にばかり

押附けてあるもんだから、私は何処どっこにも出ることが出来ないの：
 ……じゃアね奥の六畳の方へ（下女の方をふり向きて）もうお帰
 りになつたらう……汚れて居るか……あゝ、じゃ縁側附の方
 が宜かろう、あの八畳の方へ御案内申しな」

婢「じゃア此方こちらへ入らつしやいまし」

と婢おんなの案内でもつて八畳の間に通ります。

庄「何が有る」

と云うと相変らず、

婢「小田卷蒸おだまきむしに玉子焼、お刺身が出来て塩焼が有ります」

庄「たんとは飲めない口だが一本爛つつけてくれ」

と云う中うちに懐かしいから女房が取巻きに出て来た。

妻「まことにまア御無沙汰………好くねえ」

美代「私も誠に御無沙汰いたしました」

妻「好いことね、此の間も稻ちゃんだの小しめさんも来てね、噂たら／＼さ、心掛けの善い人というものは、まア誠に妙なものだ、美代ちゃんのくらい運のいゝ人は無い、世にはとんだ者に騙されて、いくらも苛いめに遭うものが多いのに、自分の思う所に請出されて行って御新造に成ると云う、そんな結構な事は何うも誠にねえ、おや是やア御免なさいませよ、始めておほ々々私アまア浮かりとして、只お懐かしいので美代ちゃんの事ばかり………藤川様とか………誠にね、予てお噂には伺つて居りましたが………そうでございましたか、遂ね、心安立にもうね、まア美代ち

やん／＼と言い慣いけて居るもんですから御新造様の事をホ、私
はがら／＼して居りました、そうでございましたか……何うも
お二人様ともお雛様を一対列ならべたようで……御ご緩ゆくりなすつて、
今旦那が帰つて来ますと自分で手料理が出来ますが、生あ憎い居にな
いから、まア緩ゆくり遊んで居て下さいな、生憎降つて来ましたが
大した降りも有りますまいけれども、まア、それに此の間しんぞね新
藏うさんがお出でなすつたが、その折あなたがお店に坐つて居た
つて、元が元だから商あきんど人の店にでも官員でも何処へ出しても本
当に上品のお内儀さんだつてお噂致して居りました、大層お似合
いなすつたこと、この丸鬻やっぱりあちらは矢張彼方の方にも芸者衆しゆや何かが居
ますから、髪結かみいさんも上手だと見えて大層宜いい恰かっこう好こうに出来まし

た事、いゝ事ね、何て………まだ島田が惜しいようですね、はゝゝ却つて凜々しくてね、丸髻の方が宜しゆうございますよ、私はいえ最う（盃を受け）有難う、たんとは頂けません………これから私が参つて茶椀蒸を拵えますから」

庄「誠に御馳走様で」

これから頻りにお酒を飲んで車夫の方にも酒が一本附きましたる事にて、車夫も好い機嫌になつて、

車夫「へい旦那様有難う」

庄「あゝお前も草鞋で此処へかけるがいゝ、其方へ踏込まんように」

車夫「えゝ御新造様有難う、何うも閑で仕様のねえ処へ言値で乗

つておくんなすつて、おまけにお酒やなんかア、まアおいしい物
 で御飯ごぜんを頂くなんてえ、こんな間の好い事はねえ、ゲーツ……………
 有難うございます……………御新造様アお何歳いくつでございすか、お綺麗
 でおいでなさるなア何うも……………御紋付がすっかりお似合いなさい
 ますな……………御新造様の御紋はお珍らしい、こりやア何だろう、へ
 え宜よい御紋ですな、是は三蓋松さんがいまつてえので、余りあんま付けません、俳や
 優くしやの尾張屋おわりやの紋でげすなア」

美代「フ、フ、（笑）野暮な紋だから屋敷や何かでなけりやア附け
 ない紋で」

車夫「旦那さんの御紋は……………花菱だけれども、実みの花菱ではも
 余りあんま人が付けねえ御紋で……………え、え妙な事があるもんだ、斯う

紋がびつたり揃つてるのは不思議だなア……え、旦那え、これ
 は（煙草入を懐より出し）実は洋服持の煙草入でげすが、黒棧くろざん
 で一寸袂ちよいとたもともち持の間に此の鉈なたまめ豆きせるの煙管が這入つて、泥だらけに
 なつて居るのを拾つたんで、掃除をして私が大切に持つて居りま
 すが、実は私わたくしどもの持つ物ではございせんから、質屋の番頭だ
 つて蔑けなしやがツて、私わたしどもに有つちやア仕方がねえ、煙管が何う
 も実に旦那不思議なんで、私にやア分らねえが、銀だつて云いや
 すが、この紋がねえ、三蓋松に実の花菱が、そつくり象ぞうがん嵌こで出
 て居るつてんだ、こいつア妙じやアございせんか、これが突込つっこ
 んだ儘なりで有るんですが、悉そつくりお両ふたかた方の紋が比翼に付いて居
 るてえのは何うも妙で、一寸ちよつとこれは何うです旦那……」

手に取り上げて庄三郎が恟りいたした。まだ是は美代吉には話をせず、自分の心の中の惚うち氣のろけに、美代吉の紋と吾が紋を比翼あつらに附けて、去年の九月四日の夜、妻恋坂の下で、これは慌てゝ取り落したものだ、何うして此の車くるまや夫が持つて居るかどぎつくり胸こたに応えましたが、側にお美代が居るから、庄「お美代お前まえと己の紋が有る、似た紋も有るが不思議じゃアねえか、不思議じゃアねえかよ、えゝそつ悉そつくり二人の紋が付いてるとは是りやア不思議じゃアねえか」

美「誰の」

庄「誰のだから分らねえ……車くるまや夫さんお前めえがそれを持つとうというのか」

車夫「わつちが持つて居たつて仕様がねえんですが、あなた紋がそつ悉くくつり附着いて居やすが、お廉やすく何うか廉くお買いなすつて下さりア有難てえんですがな、わつちが質屋なんぞに持つて往ゆきますと手数が掛つていけませんや、そつくり貴方のごじよもん御定紋だから持つて入らつしやりやア私わつちが是を拾つたとも云いやせんが」

庄「買つても宜いいけれども幾許いくらで売ろうてえのだ」

車「こんな物で、幾許でも宜いうがす、まア人に聞いた処ねうちの価値は五十両が物は有るつてえので」

庄「なにが、冗談どいっちゃアいけねえ、無垢むくの煙管の誂どえで、何んなにしたつて、何う目方が附いたつて五十両なら出来るじやアねえか、こればかりの鈍豆の煙管を五十円遣つて買かう奴が」

車「たゞの煙管とは違うんで、紋がちやアんと御新造様の紋とあなたの紋と比翼に付いて居るとこがこいつの価値ねうちだ、はゝア誂れえりやア出来るが、わつちが持つて居るといけねえものだ、持つて居ればよんどこ抛なろなく訴えなければならねえ、去年の九月四日の晩、妻恋坂下の建部………サだからって」

庄「む………なに」

車「拾とつた処とこを云わなければならぬが、御迷惑が掛つちやア済まねえから、売うりてえのを我慢して、何うか御当人にお渡し申してえと思つて、今まで腹掛かくしの隠つ込こに突込んでいた所が、何時までもね工其の人が知れねえんだ、まア持ち腐れじやア詰らねえから、旦那御紋所がちやアんと合つて………五十円」

庄「馬鹿ア云つちやアいけねえ」

美代「お止よしなさいな、お止しよ………車くるまや夫さん大概におしよ、

五十円なんて誰たれが人馬鹿々々しいじやアないか、金鈍きんどんす子か何か

の丸帯が買えるわ」

車「帯は買えるんでしようが、これは煙管の紋が………そりアち

寸宜つといので」

美「宜いのでたつて、そんな高い煙管や何か買える訳のもんじや

アない、だから、あなたお止しなさいよ、（車屋に向い）まア宜

いよ」

車「無理に私わっちアお上げ申すという訳じゃございませんので、私が

これまで持って居たのは悪いから、それだけ叱られて仕舞いさい

すりア……斯ういう訳でがす、私ア酷い目に逢いました、建部の側わきで私ア溝どぶの中に転がり落ちて何うも物騒ぶせうで、雨の降る中びしやアリという訳で、何うも……なアに人てえ者は見掛けに依らねえもんで、まア私は訴えますから」

庄「まアく宜い、若衆わかしさん、買う買わねえは兎も角も一杯いっぺえ此処で飲みねえ、お前めえも何だろう、腹からの車くるま挽まひじやアあるまい家は何処うちだい」

車「家は無ねえんで、ふてつくされ猪武者いぬしむしゃ、取っただけは飲んでしまつても仲間の交際つきあいと云うものは妙なもんで、何うか斯うか腹へア空れば飯いい食つてまア……無理にといい訳じやアないんでげすが、お互に時節柄斯ういう訳になつて車ア挽まひくんで」

美「酔つて居るからお止しなさいよ、御飯ごぜんを食べさせて帰しまし
よう、酔つて車ア挽けやしない、お内儀ちよつとさんを一寸呼んで、別
に車を誂えましょう」

庄「お前往つて呼んで来な、手を叩くと旦那じみて極りが悪いか
ら、一寸往つてお出で、（美代吉の跡を見送り）若衆わけいし」

車「えい」

庄「煙管を己が買おうが、今は持合せが無ねえんだ、己と一緒に：
……家内が居るから家内の前めえで高い煙管を何で買うかと思われて
も困る、金を他に借りる処ところが有るから、己が一人でお前めえの車へ乗
るから、往つてくれ、ば金を借りて渡すから、此の煙管と引替に
売つて下せい」

車「宜しゆうございます……御新造さんは知らねえのか……いや承知いたしました、万事心得ました」

庄「そんならば」

とて福寿庵の女房を呼び、何やら密々こそく耳こすりを致し、お美代を蠣殻町まで一人で帰す事に相成り、一人乗の車を別に雇い、お美代を先へ帰して置いて、自分は大西徳藏の車に乗つて金策に谷中の蛸ほたるざわ沢にまいるというお話でございますが、一息つきまして申し上げます。

六

へい藤川庄三郎、彼の大西徳藏という車夫に供をさせて、人力でどつとと降る中を谷中の笠森稲荷の手前の横町を曲つて、上にも笠森稲荷というが有りますが、下の方が何か瘡毒の願が利くとか申して女郎衆や何か宜くお詣りにまいつて、泥で拵えたる団子を上げます。あの横町を真直に往き右へ登ると七面坂、左が蚩沢、宗林寺という法華寺が有ります。その狭い横町をずうツと抜けると田圃に出て、向うがすうつと駒込の方の山手に続き微かに未だ藪蕎麦の灯火が残っている。田圃道で車の輪が箱つて中々挽けません。

徳「旦那いけませんな、こんな道じゃア何うも方が立たねえ、旦那何処へお出でなさるんで」

庄「まア最う少し遣つてくれ」

徳「もう少ししたつて往いけませんな、何うもこの道じゃア」

庄「じゃア歩こう、まア此処おろに下しておくれ、何うしたつて金策に往くんだから、お願いだから提ちようちん灯あかりを持って、車は此処へ置いてお前一緒に往つておくれでないか」

徳「へい、それは何処へでも行きやすがな、私わっちにやア………唯で

さい歩き難にくい道だに、お前さん何処まで往くんだか知らねえが、困りますな何うも」

庄「だが好いい塩梅に少し小降こふりになつた」

徳「えい大きに小降に成つたが、何うも降りやすね何うも………

旦那去年の九月四日の晩も此こんな様に降りましたな」

庄「うむ左様かなア、去年も降つたのだから覚えねえ」

徳「へん、降つたか覚えねえ、旨く云やアがる、妻恋坂下のね建

部裏まで通りの客を挽いて往つた時に、ぴしやアりと提灯を切ら

れた時に私ア胆わつちきもを潰して、あの建部裏の溝どぶにおっこつちまつた、

好よい塩梅に少し摺剥すりむいたばかりでたんと負傷けがはしないが、泥ぼつ

けえ、寒くて仕方がねえから、夜明よあかしに這入つて酒え飲んで、転

がつちやつた、処ところがその客は私ア縁が切れては居るが、かたづい

ている妹いもの亭主ていしゅだ、それとは知らねえでおまはんから何うも……

…後あとは妹一人で仕様が無ねえ、今では横浜はまへ往つて居りやすが、何

うも身上しんしょうを大きくするくらいくらいの奴は無理な算段でもつて店を明け

るような事が有ろうが、何うもへへへへ、借財がまア多く有つ

たもんだから店を明けている訳にも往かねえで、今では子供を連れて横濱へ往つてますが旦那、冗談じゃア無え、あの時私ア拾つ

た煙草入だから五十円じゃア安いもんでしよう」

庄「ふむ、おまえは彼時に挽いてた若衆か」

徳「へ、あの時に私ア……、彼奴を殺しておまはん金え奪つたん

でげしよう、その金で彼の別嬪を身請をして、惚れた同志が夫婦

になつて葉茶屋を出してるなんてえ、へ、羨しい話じゃア有

りやせんか、此方ア未だぶらちやらして居るんですから直にまア

野暮な事を云わねえでさ、面倒だア買つといておくんなせいで、五

十円でははおまはんが買つて下さりやア私ア其の金を資本にして

一商法、私が宜くなりや浜に居る妹も引取つて、又お前さん

に恩返おんげいしの仕しられねえでもない、そうすりやおまはんちつの些ちつたア
罪も消えると云うもんだ」

庄「うゝ先刻さつきの煙草入はそれじゃア手許てもとに有るかえ」

徳「ふむ有るゝそれでねえ」

庄「なアに私わしが落した煙草入と違っている、紋は実の花菱と云つたが、一寸ちよいと出して見な」

車夫くるまやの出すのを取つて、

庄「提灯を上げて見な」

徳「えゝ是でがす、よく御覧なせえ」

庄「はア此りやアなんだ違うよ、大變違うよ（懐中に入れる）」

徳「どゝゝ懐つっこに突込んじやいけません、懐つっこに突込んじやア」

庄「宜いよ、違つても違わんでも彼の時に挽いた若衆と云やア
何にも云わず五十円で買おうが、決して他言をしてくんなさんな」
徳「そりやア必ず云いません、今こそ車夫だが大西徳藏、聊か徳
川の臭い米を食つて親を泣かした人間だから、云わんと云つたら
口が腐つても云いはしない」

庄「それで安意致した……人が来やしないか」

徳「いや田圃の中で此の大雨、来る人はございやせん」

庄「向うに見える灯火は」

徳「ありやおまはん藪蕎麦だよ」

庄「おゝあれが藪蕎麦か……向うに見えるは」

と徳藏に向うへ眼を付けさせて、見ると懐から拔出した合口を

と
把つて、力にまかせぶつうりと突いたからばたりと前にのめりま
した。この騒ぎを少しも知らないのはお美代です。婢おんなは元数寄屋
町の有松屋に奉公していたのを、お美代が旦那を持つてから自分
の手許てもとに呼んで、昔話をするのをたのしみに致して居ります。

美「今帰ったよ」

婢「おやお帰んなさい」

美「お前後生だから折おりが二つあるから、お皿を三つばかり持つて
来て……くつついていけないから……それは栗の金きん団どんだよ、お
前は甘い物が嗜すきだから是を上げるよ」

婢「これは私は最う何より旨いと思つて居りますよ、それとねねえ
さんお座敷の時のねえ、あれは何でしたっけね、あの斯うしてそ

ら斯うして丸くつて、それ付合せのお着でございますよ」

美「おゝそうく、むつの子がお前は嗜きだったね、お前に持つて来たんだからお食りよ」

婢「ほんとにねえ、あの有松屋の婆さんのように吝い人は有りませんわ、何でも食ろといふ事が有りません、だからねお芋や何か買つても、あなたも知つて入らつしやるけれども、ほんとに何ですのほゝゝあなたなんぞは稼人ですからだが、私なんかには焼芋を買つても、一番冷たくなつたお尻の方で無くてはいけませんの、あれでお金を溜めたつてね、本当にまア悪く云つちやア濟まないが、本当にいまだに覚えて居りますよ」

美「そうくあの時分にお前お砂糖を盗んで甜ていた処を見附か

った事があつたね」

婢「そうく、あゝ知れませんが、時々さじで出して甜めました事がありましてね、一遍知れたよ、私が口の端はたに附着くっいて、少しの間板の間に坐らせられた事が有りましたよ………大層結構な、これは福寿庵の、大層お上手ですこと」

美「あの旦那が元御用達で、旨い物は食べつけて居て、それでお内儀さんが元芸者で苦勞して、方々の料理茶屋の物を食べて居るから、何うしてもなんだねこしらえ調理は上手だよ」

婢「そうして旦那様は何処どっかへ………」

美「あゝお金を何うとかと云つて往つたよ」

婢「大層遅いじや有りませんか」

美「なアに今に帰るだろう、旦那が帰ったら一口召上るかも知れないからね、少しお肴を支度して置いておくれ」

いくら待つても帰りませんので案じていると、ちーんくとい
う二時の時計。

庄「大きに御苦勞く、若衆わけいし（車代を払う）……………帰つたよ」

婢「はい旦那様がお帰りですよ」

美「あれさ起きなくつても宜いいわ、寝ておいでよ……………只今明けま
すから……………おや車で、若衆わかいしゆさん大きに御苦勞」

車「へい」

美「お茶でも飲んでお出でなさいな、そう大きに御苦勞様……………

あなたあん余まり遅いからお泊りに成つたのだろうから、私も今寝よ

うと思つた処、あゝ宜よい塩梅ひときりに一時降つてから小降りひときりに成りまし

たねえ、それにね蝙蝠傘は漏りはしませんか」

庄「なに車に乗つたから傘は要らなかつた。」

美「そう、甚ひどいのに何処まで往つておいでなすつたの」

庄「王子の茶園に往つて送り込こみを頼んで来た、二三日中ちうちに送り込

むだろうが、来なければ又往つて遣らうが」

美「着物が大変泥だらけですね」

庄「えゝ着物か、着換えよう」

美「さアお着換えなさい、何うも是からまアほんとに泥が附いて、

ま何うしたんだらう、あら血が附いてますよ」

庄「なゝゝなんだ、あアあのなんだ、こゝ駒込めえの富士前めえの方から

歸つて来たたら、青物市場の処とこを通ると、犬が五六匹来やがって足へ絡からまつて投げられた、其の時噛かみ合あつた血だらけの犬が来やがつて、己に摺附けたもんだから」

美「あらまア穢きたないじやアないか、些ちつと乾ほしましょう」

庄「あゝ其方そつちの二畳の部屋の方へ出して置いてくれ、穢けらしいから……おい一いっぺえ杯酒を飲もう」

と是から酒を飲んでぐうツと寝てしまった。翌日あしたになつて車くるま

夫やが持つて来た煙草入に煙管の事を聞いても、知らんと云い、

彼あれやそうじやない、煙管も知らん、と云つてお美代にも隠し置いたから、誰たれあつて知る者は有りませんが、それから翌年に相成りますると、一月げつあたりは未だ寒氣も強く、ちようど雪がどつど

と降り出して来ました。幫たいこもち間 三八の腰障子の閉たつて有る台所

に立ちましたのは、奥州屋の女房おふみ、三歳みつに成る子を負おふいま

して、七歳ななつに成るお豊とよという子に手を引かれて居ります。駒込こまごめ

かたまち 片町の安泊やすどまりに居りまして、切通きりどおしの坂を下りてよう／＼

此処まで来る中に二度転んだと云う俄にわかめくら盲やまがでございます。柳

川わつむぎ細あわせの拾一枚、これも何うも柳川細と云うと体裁が宜よいが、

洗あらいは張あらいはりをしたり縫ぬい直なおしたりした黒くろ縷じゆす子の半襟が掛けてある

が、化物屋敷みすの簾みすのようになつて、王子の製紙場せいしほへ遣

つても宜しいという結びだらけの細帯、焼穴やけあなだらけのあめとう

の前掛が汚れ切つて居ります、豆腐屋の物置から引出したと云う

ような横倒しに齒の減つた下駄はを穿はいて、ぶる／＼ふる慄ふるえながら、

豊「お母ちゃん、ちやア此処だよ〜」

ふみ「はい……………御免なさいまし」

女「はい……………おやく〜いけない……………其処を明けちやアいけない、北向だから、此処の家は風が這入って寒くていけないから……………もう出てしまつて有りませんよ」

ふみ「いえ私は物貰いではございません、三八さんのお宅は此方
でございますか」

女「あゝあ……………はい手前でございます……………お師匠さん 貰 人
が来ましたよ、一夜明ければ直に来るんだから驚くね何うも」
三八「どなたで……………何方で……………」

ふみ「はい誠にお久しゆうございます、私は奥州屋の家内で」

三八「へ、へいへいこりやア何うも御新造………何うもあなたお
 目が悪くおなんなすつて、おゝこりやアお目が………おいゝ婆
 さん、あのね足を洗わなければならぬ、跣足だ、雪の中を跣足
 で、なにを湯だよ、洗濯の盥たらひでなくても宜よいてば、何を、えい強
 情張らなくても宜い、知つてるお客様だ、手てぬぐい拭ひの乾たのを持っ
 てお出で………さ此方こつちへ」

ふみ「はいゝゝ恐れ入ります」

三八「まあゝそんなことは御遠慮なしに、えい這入つて宜しゆ
 うございますとも、なアにそんな事を、此方こつちへお上んなさい、嬢
 ちゃん大層おみおおきくお成んなすつた、何ういうまア何ですか、
 お寒うございましたらう、何処から、駒込から、いやそれは大變

でした、さゝ此方へお出でなすつて火鉢の側へ、婆さん炭すみとり取を
 持つて来て、其方そっちにも火鉢を出しな大勢だから一つの火鉢にかた
 まる訳にいかねえ、それからお茶を入れて菓子を出しねえ、何い、
 そう幾つも手が有りませんと、強情げりげあツ張の婆だ……さ此方へ……
 …お変りもございませんで……御難渋かねの事で、予て承わつて居り
 ますが」
 ふみ「申し三八さん、私も此こ様んなおちぶれましてございます」
 三「へい誠に御無沙汰致しました、横浜にお出でなさる事は聞き
 ましたが、何うも浜だから一寸お尋ね申す事も出来ず、お目の悪
 い事も存じませんでした、何れいず又病院にでもお入りなすつてお
 療治でも致せば」

ふみ「はい有難うございますが、病院へ入りまして、入院中も種いろく々お医者様も御丹誠なすつて下さったが、何うも治りません眼と見えまして、もう何も彼かも売うり尽つくしまして此様なにおちぶれ果てました、私わたくしはもう前まえ世のよの約束だと思つて居りますが、親の因果が子に酬むくうとやら、何にも知りません子供たちにまで（涙をふき）饑ひもじいめをさせます、何方どちらと云つて知っている人もございませんで、始めの程は御懇意様やお慈悲深き方から救われましたが、又二度とも参られませず、新助がお馴染でございますから、何うか三八さん（戯すゝりなく 歎なげ）あなたの処ところへなんぞ申して参られた訳ではございませんが、能よく々おほしめと思召して、子供を可愛想と思つて、少しばかりお恵みなすつて下さい（泣なき伏ふす）昨日きのうから子供達には

未だ御飯ごぜんを食べさせません、今朝程少しばかりお芋を買って食べさせましただけで」

三「お、おや御新造何うも何ともはや、人という者は何うも過ぎて見なけりア事の分らねえもんでげすが、あなたの処とこは結構なお身代で、旦那さんは一寸お出での時きんがわも金側の時計を頼まれ物だとおっしゃって、五つも六つも持つておいでなさる、あの御身代が今のお身の上、三八などは前から貧乏だから格別貧を苦にも致しません、良い人ががたりと斯うなるという誠にお困りなさる、矢張あなたなんぞは結構のお身の上だけに、貧乏ひどに甚く驚くと云うもんで……旦那様が妻恋坂下で三年後あとに御切腹なすつたと云うのだから、これが何うも驚きましたね、何うも」

ふみ「はい、それにねあなた、あの時に人様からお預かり申した大金がございます、それと金側の時計が一つ紛失なくなりました、金もかねございせんから、若し盜賊にでも取られまして、それであゝいう堅い気性でございまして、はツと取りのぼせましたか、又預り金を取られ申し訳が無いと切羽詰りに成りまして、あゝいうことに成りましたか、もう歿なくなりますと、中々先の貸金は参りませんで、借財も多くございましたから、人様も、道具を運んでしまつて、他家わきへ預けて身代限りを出して仕舞え、そうすりア後あとで何の様にも身代が出来ると云つてくれたお人も有りましたが、得心づくで借りた借財、何うしてあなた、そんな事が出来ましよう伽がらんどう蘭堂らんどうにしてお渡し申して、残らず店の品物まで売り尽しまして

お返し申したから、手許てもとへは僅か百二十円有りましたが、それから私は眼が悪くなり、病院に這入ったり何や彼やで遣い果し、浜でも富貴楼の御夫婦が御親切になすつて下さったが、東京こっちに親より戚も有りますから、それを力のぼに上りますと、昨年あの九月其の親戚あの者も何ういう因縁でございますか人手に掛つて非業な目に遇あい、その葬とむらい式しきまで困る中で私が出す様な訳、何処どこと云つて頼るとこ処もございませんから、駒込片町の三春屋みはるやと申す安泊やすどまりに居りま
する」

三「おやく、何うも間が悪いと悪い事ばかり出来て、間が善くなると一切何うも善い事ばかり出て来るものだから、又是から悪い事ばかりも有りますまいから、御心配なさんな、わたしはお金も

何も無いから、芸者屋へ行きましよう、旦那様から御祝儀を頂いた芸者から勸化帳かんげちようでなく、小さな一寸した帳面を拵えて往つて、志を何程でも、旦那様の何なんでがす、御鼻肩になすつた芳町よしちようにきんばち金八にお豊も御ひいきに成りました、義理が有る処ところで、先松源まずと鳥八十、大茂へまいりまして、又下谷の芸妓ではお稻に小メ

《こしめ》、小竹こたけ、小彘つ、おみき………兎も角も私が往つて貰うような事にしましよ、若い処ところの芸者や何かは会の義理を出すと思えば貴方一寸びらを拵えても、びらが五十銭に贈物おくりものが二円も掛る、大した散財に成るんだもの、それは又僕が何うにも致しやす、何うにか成りますよ、氣を落しちやアいけません、嬢ちやん何うも温順おとなしくお成んなすつたが、何うもお加減が悪うござ

いますか、大層お痩せなすつて」

ふみ「なにあなたね、続いて二日ぐらい食べぬ事が有りまして、又食べさして又たたた食べ……（泣沈む）何うもがゞ餓鬼道のようでございますから瘠やせます訳でございます」

豊「お母つかちゃん、お飯まんまが食べちやいなア」

三「おゝゝ上げますゝ………婆さんお膳立をしてくんな、な何を、お飯を何うしたと、冷ひやではいけません温あつたかいのを、お雛ひなさん処とこへ往つて借りて来な、何か無いか家うちに、何を何処かに往つて鳥鍋かよせ鍋でも何でも熱い物でさいあれば………なにを雪が降つてる、雪だつてお前春の雪、そんなに寒い事はない………さゝ

御飯おまんまを」

これから親子の者にお飯を食べさせたので、大きに温まりがついた。

三「もし男の胴着や何かは女には着悪いが、家には独身者ですから、女が居るには居りますが女の部には這入ねえで、女の大博士に成つちまつて、羽が生えて飛びそうな雇婆です、えいまアお前さんは少し此家にお待ちなさい、集めて見ましょう、いけないと云つたらお前さんも御一緒に御出でなさるよう、先方だつて人情ですから出しましょう」

とはから三八は先ず彼方此方を頼み散かして歩くと、立引に見得張る商売ですから、あの人が見許出したから、まアわたしも幾許出そうと云うので、多分にお金が集つて来ました。

三「もし御新造さん旦那が善い方で物を遣つて有るから、旦那の愛敬で何うもお氣の毒だ、私にも出さしてくれと云つて呉れます、若い芸者衆やなんども、呼ばれた事は無くてもお名を聞いたばかりで出すから、三八出さしておくんなさいと、これが旦那の徳と云うものは恐ろしいもんで、何うも大したもので、是から柳橋と新橋と吉原へまいりましょう」

ふみ「はいく何ともまあ……それもあなた様の御親切で」

三「此の他には全で方なしの処には往かれませんが、あゝ善い事が有ります、旦那が一番鼻屑にしてくれた人という者は何で美代吉さんです、是が運の善い人で、自分が惚た男に請出されて、蠣殻町に居たのだが、越して新らしく此の頃建つた家を借りて、

それが今御徒町おかちまち一丁目の十六番地へ葉茶屋を出しました、松まつや

山園まへんとかいう暖簾のれんを出して、亭主おやだまの方が坊ちゃん育ちの善い人

だから、それに美代ちゃんは旦那に御鼻屑おびになつたんですから：

……分らねえ奴は有松屋ぼッアの婆ばアさ、何だかぐずぐず云いやがつて、

否いやなら止よしやアがれとも云わないが……それとちがいは是は大丈

夫だ、先方むこうが大きいから二十円や三十円は出してくれるかも知れ

ないが、まアあなたを連れてつて見せなくてはいけない」

ふみ「何ともお礼の申し上げ様もございません」

三「何う致しまして、何なんにしろ跣足はだしじやア往いけません、何に仕ま

しょうか、車をそう云つてお呉れ、此の嬢お嬢ちゃんと合あ乗のりに乗つ

て三人に成ります、それ故に三人乗つてそろくひ挽ひいて、僕は贅むだ

だからぼつ／＼下駄を穿はいて歩いて往く方が便利だ」

と親切な男で、車を拵おそえて、余り遠くも有りません御徒町松山園に参り、台所から、

三「へい今日こんちは、夜分おそ晩く出まして、相済みません」

婢「はい入どちらつしやい何方らさま様」

三「えい御ご町てい寧ねいでは困ります、数寄屋町の三八で」

婢「勘かん八ぱちさんと仰おほしやりますか」

三「勘八ではございません、三八ですとそう仰おほしやって下さいませし」

婢「はい、あの何です数寄屋町の雁かん八ぱちさんという方が入いらつし

やいました」

三「何うでも間違つてやがらア」

美「そう、おやまア何だね、表から這入れれば宜いのに」

三「いえお店の方から這入つて茶の壺を引倒した事がございますから……誠に御無沙汰致しました」

美「もし此方こつちへお上んなさいな」

三「お取膳とりぜんで、八寸を四寸ずつ喰う仲の善さ、という川柳があります」

美「何をえ」

三「何でも始めは穢きたない物を連れて来たが、段々綺麗なお話に成るので……旦那誠に御無沙汰を」

庄「おや、さ、此方こつちへお這入んなさい」

膳を片付けそうにするを無理に止めます。庄三郎は織色の羽織を著きまして、二子ふたこの茶くろつの黒くろつほい縞しまの布子ぬのこに縞しまの前掛ぬのこに、帯は八王子博多を締めて、商人然あつとしている。かたゝくの方は南部らの乱ら立んたつの疎あらつぽい縞しまの小袖、これは芸妓の時の着替かをふだん着きに卸おろしたと云うような著物きものに、帯おきなごうしが翁格子おきなごうしと紺この唐繻子とうじゆすと腹合せはでくの帯おきなごうしを締めて、丸鬘あさぎかのこに浅黄鹿子あさぎかのこの手柄てがまが掛かつて、少し晴々はでくしい商人の細君こ然あつたるこしらえでも自然あつに垢ぬが脱ぬけて居ゐります。仲なつの善あつい夫婦あつで、思あついに思あつつた仲なつでござあついますから、お飯まんまを食あつべても物あつを衝あつき合あつつて食あつべるが面あつ白あついといあつう間柄あつです。三八あつも馴染あつだかあつら、

庄「さこち此方らへ」

三「旦那追々御繁昌で」

庄「此の間は何うも何ですな、池の端の方へ小僧に持たして遣り
ました時に多分に買つて下さつて」

三「いや何でも多量たんとという訳には行きませんが」

庄「なに些ちつとずつでも度々たびく買つてくれる人が有れば善よいので」

三「大變に何うも、いえ評判が宜うがす、一つは此方こちらの御新造が
御器量いが美いいからお茶の色がよく出ますとね」

美「あら何うも情いろが出る、いやな油だ事よ」

三「そういう訳ではない御新造様」

美「御新造様なんて名をお云いな」

三「それ何うも凜々りん々しく成なつちまつて気が詰つります……おかみさ

ん、誠に何うも御無心に來たんです、芸者衆の処とこに斯うやって帳面を持つて貰つて歩いて、金も集りましたが、是では何うも親子ゆきた三人行立たないので……世帯しよたいを持たして何んな商法でもさせたどいと思つてもお母つかさんが目が悪いんですから、と云つて親の有る者は育児院では入れてはくれますまいから、仕様が無いから、何うか工夫をするにも金さいありア附かない事も有りません、それは他でも有りません、あなたを日頃御鼻屑にした奥州屋の」

美「奥州屋の、おや」

三「それ美土代町の新助さん、妻恋坂下の切腹三法南無三法さ」

美「あゝそうかね、それが何うしたの」

三「何うしたつて仕ねえつて、驚いたね何うも、駒込の安泊やすどまり

に居るつてえんで、何だか目が潰れてしまつて、本郷の切きりど通し
を下りるにも三度どとか四度たびとか転んだが、下へ転がり切らなけり
やア、落おちつ著ついてこれから歩き出すという身の上にやア往いかないて
えんで」

美「何うぞ此方こつちへお這入りなすつて……お初にお目に懸ります、
かねてお噂には聞いて居りましたが、さア此方へお這入んなさい
……この火をなんして上げな」

ふみ「お初にお目に懸ります、新助はお心安いそうでございます
が、私わたくしはお目に懸つた事も無いに、新助が彼あんな訳に成りまして
から、だん／＼零落れつらくいたして……親子の難儀を三八さんが可愛
相と仰しやつて下さつて、此方こちらさま様まで御無理を願ひに上つて：

……お蔭様で親子の命が助かります、誠にお気の毒様で」

庄「お、いゝや御心配しなさんな、三八さんわたくし私は何でもお力に成りますから、まアく心配しなさんな」

と庄三郎親子ぐるみ引取つて世話を為しにやならんがなまじい※に云い出してはと庄三郎思案にくれました。お美代は知りませんから此方こちらと是から昔物語になりますと云う、ちよつと一と息。

七

そこでお美代が火鉢たんとに沢山火を取りまして、親子の者を五徳に並べて、たつぷりとした茶碗に茶を入れて出します。有合わした

お菓子を紙に包んで子供にあてがい、

ふみ「おや有難うございます、お構いなすつて下さいますな、有難う存じます」

美「おや可愛らしい事ね、女のお子さん、お何歳いくつに成ります」

ふみ「はい七歳ななつでございます、豊と申します」

美「おゝそう親の無い方かたは温順おとなしいもんですね、可愛いじやないか何うも、お少ちいさい方ほうは」

ふみ「はい男でございまして、三歳みつで新太郎と申します」

美「そう、温順しい事ね、叔母ちゃんとこ処とこに今夜は最う遅いから泊つてお出いでよ、泊つても宜いいかい」

豊「あゝお母つかちゃん、あの叔母ちゃんが泊れと仰いしやるから泊る

よ、泊つても宜いかえ」

ふみ「いえもう穢きたない姿で……何うかお邪魔に成りませんお台所だいどころの隅にでもお寐ねかしなさつて、今居ります安泊りのような、あんな穢とこい処とこに居るものでございますから、只夜よを明かさしてさえ頂ければ……これ、そう戴すくいて直すくに食べるものではない、お行儀の悪い……久しくお菓子も買つて食べさせる事が出来ませんから……こんな育て様は致しません、この頃はがつく致しまして、幾ら小言を申しても、下さると直すくに食べるので……そんなにお口に入れる者じゃアないよ」

豊「だつてもね、わたしは食べたいもの、あの腹ぼんぼが空ぼんぼいてるから」

三「まことにお可愛そうじゃア有りませんか、これが奥州屋のお

嬢ちゃんやお坊ちゃんとは思われません……えゝなに子供衆しゅだ
 から氣儘いっぱいにさせて置くが宜しい、実に乱暴な児こが有りま
 すからな、此の間も私の家うちに這入り込んで、鍋や何かの物を掴み
 出して食つたり、種いろく々の器物ものを放ほうつたりして何うも……それに
 旦那のない後のちに此のお内儀かみさんが正直な氣性だから、身代限を出
 す時にも大概の横おうちやく著の奴なら、道具や何かは親類にこかして
 空からあき明にして預けて、後あとでずうツと品物が廻まわつて来るようにと云
 うのが普あたりまえ通だのに、残らず店の品物まで売つたという、そう
 して先方むこうに心配を掛けないなんて……矢張やっぱりあなたそうくゝ悪い事
 ばかりはございませぬから、まアお眼を……何うか一番上手なお医
 者さんに診みてお貰いなさい、おゝ永田町の伊藤いとう方成ほうせい先生が、私

はあの方に御鼻屑になつた事がございますから、その中又願うちいに
 出ましよう、貧乏人にはお薬をたゞくれるてえんでございますか
 ら、私が頂いてまいりましよう、それはお上手な事は、お医者さ
 んがわるいと伊藤さんにかゝると云うくらいだから、内瘻そこひが眼が
 明いて駄け出したり何かなんするんで、何うも不思議じゃア有りませ
 んか、それにお嬢ちゃんも七歳ななつにお成んなさりやア学校に入れて
 教育しなくては、そして御親類と申すのは何ういうなんです」
 ふみ「はい、私の兄で元徳川の士族でございまして、大西徳左おおにしとくざ
 衛門えもんという者の総領で、この兄の名は徳造と申して、これも峯
 樹院様の御用達をして百俵も頂いて居りましたが、放蕩無頼で、
 蔵宿くらやどには借財も出来、頂戴物やら先祖の遺物ゆいもつまで何も彼も遺か

い果し、終には私の身体まで売ろうとして、私を騙して悪い処へ沈めようと掛りましたくらいの磊落者でございませう、それでもたつた一人の兄でございませうから、また相談に乗らない事も有るまいと浜から出て来て見ますと、昨年とせの九月四日谷中の蛭沢という処で非業の死をいたし……是も乱暴の罰でございませうが、殺した奴は何者でございませうか、多分御酒を飲んで暴れか何か致して斬り殺されてしまいましたのでございませう、その検屍の事から葬式も此の難儀の中で私が出す様な事でございませう」

三「へいえ何うもお不仕合せ、なれども御新造さんは根が武士のお嬢さんだから何うもと平常私が申して居りました、一昨年花の時に御新造様の御様子が何うも町人とは違いますと云いますと、

旦那が、えゝなアになんて瞞ごまかして仰しやらなかったが、何うも違ふと思つて居りました、兄様あにさんと云うのは酷ひどうございますね、

一体何をしてお居でなさつたので」

ふみ「はい、零落おちぶれまして車を挽ひいて居りました」

三「車夫くるまやを殺して何も盗とる訳もないのですからな、何うも中に筒ツぽの古いのが丸めて這入つてるだけですからな」

ふみ「はい、矢張やっぱりお酒を飲むかなんかして、暴れて斬られたのでしよう……あれが」

三「いえ何うもそれに、あなたの処の旦那の何うも腹切りが、何うしても、分らないというのです、そりやア何方どちらでも評判です、あのように沈おちつ著いて居る方がね何うも」

美「ちよつと三八さん、あの何だね、一昨年おとしの九月四日にね……
 ……鼻肩だつて情夫いろでも何でも無いのですが……あの晩にお帰り
 なさらなきやア彼様あんなことは無いものを……あれをお帰んなすつ
 た晩だよ」

三「そうですね、何ういう訳でがしような、あれは」

ふみ「はい何うも御検屍を願ひまして腹を切つたという事には成
 りましたけれども、もう実は仰しやる通り沈著者おちつきもので、種々いろくに
 分別して、人という者は事を落著おちつけ心を静めて見れば、何んな事
 でも死なずに済むものだおれと申して、己おれなんぞは是まで苦勞をして
 来たから何んな貧乏おちぶに零落おちぶれても困りはしない、又工面が宜く成
 っても困りはしない、何でも詰らない事をくよくく思ふな、心を

広く持つてと、一寸寝酒を飲みましては私共の心の落著くように云つてくれまする、貯えて居りました金子は他人ひとの預かり物ですが、それが有りませんでしたから、多分盗賊ものどりだろうと思ひます、それに金きん側がわの時計がございませぬ、何うも腹ア切つた後あとで、まさかあんな姿をしている処どころを盗賊も掛りますまいとは思ひますが」

三「そう云えば彼の時あに何ですぬ、乗つてお歸りなすつた車夫くるまやね、何だかぶきくした奴ね、車夫さん急いでお呉れたら、急げたつて人間の歩くだけきやア歩けやしないつて、私ア忌々いましくていまだに忘れられねえ、彼奴あいつが何うもなんと云えませぬよ、何うも変な奴だね、実に何うも腹を切るといふは妙ですな、それとも預かり物を取られまして、先方に申訳が無いといふ堅いお氣

性で」

ふみ「はい、私の良つれあい人は元は会津様の藩中でございまして、少しばかりお高を頂いて居りましたから、今では商人に成りましても武士の心は離れません、あゝ濟まないと、堅い気性から切羽詰りに相成つて」

美「もしあの奥州屋の旦那様は会津様の御家来ですの、会津様の何というお方、重おもやく役のお方でございますか」

ふみ「はい、私も委くわしいことは知りませんが、お高も余程頂戴致した様子……松山久馬の次男の久次郎と申す者だとよく私に申しました」

美「あらまア、まア何うも、あら松山さんていの、あらまア一寸

三八さん旦那は私の兄あにさんだよ、何うもまア」

ふみ「はゝア、あなたは妹いも御ごあらまア」

美「私がね生れると、道楽で御勘当になつたという話をお母つかさんが死ぬ前に私に申したんですよ、お兄あにいさんは家出をしてしまつたツて、私が生れて間もない折ですよ、お兄あにいさんに遇あいさいすれば力に成ると思つて、私は神信かみしんじん心して居たが……道理で、それ私のお父とつさんの書いた短冊が貼つて有つたら、家うちへ来て」

三「そうく、そう仰しやれば思い出した、あの時ほろりとお泣きなすつた……それからあなたの身請の相談、これは本心放埒ほうらつで、敵かたきを討つ所存はねえに極きわまつたとも云わないが、請け出しに掛つた時は変だと思つて居りました」

美「だからね兄にいさんは只可愛がりなすつたのだよ、それで無くてあんなに可愛がる筈はありやアしないね、知つてたから」

三「あの何うもその短冊が何うとか云いましたね、親が何うとかして何うとかだつて……あれからお上りになつて、それで身請と成つたんでしよう、だけれども間夫まぶが有るなら添わして遣ると、何うも由良之助見ていな事をおつしやつたが、その歸りに與市兵衛べえ見ていに殺されるていのは何うも分んねえ」

美「殺されたのならば私も何うも残念で耐たまりませんよ」

ふみ「私も何うも人手に掛つたと存じますが、もし殺した奴でも分つたら、眼が見えなくとも武士の家いえに生れた女、亭主の仇あだを尋ね探して討ちたい心も有りましたが……あゝ斯様めくらに盲人に成りま

しては」

美「おゝ不思議な御縁でお目に懸りました、私の兄の女房なら私の為にはやっぱり姉さんねえ、兄さんあにの敵だつて討てない事は有りません、ねえ庄さん、お願ねがいですから若しも敵が知れましたら、藤川さん貴方も以前はお旗はたもと下ではありませんか、たとえ女の細腕でも武士の家に生れた私です、一生懸命になりますから、助太刀して、屹度きつと知れたら、敵を捜して討たして下さい」

というのを聞いて居りましたおとよが七歳ななつでは有りますが、伶俐こうな子でありますから、

豊「お母ちゃんつか、お父ちゃんとつを殺した奴が有れば、豊ちゃんも敵を討ちます、この叔父ちゃんに手伝つて頂いて、ね叔父ちゃん手

伝つて敵を討たして下さいよ」

ふみ「あい／＼よくお云いだ／＼、死んだお父さんが草葉の蔭で聞いたらさぞお喜びなさるだろう……：……：親孝行の事を云つておくれだ」

三「へい感心々々感心」

ふみ「只今の世の中では敵を討つことの出来ない世の中とは予てかね聞いては居りますが私は昔風で、何うか敵を討ちとうございます、もし敵が知れたらば私さえ殺され／＼ば宜しゆうございませうから、何うぞ敵を討たして下さいまし」

三「まあ／＼感心だ、実に年は往かないが、是は矢張松山さんのお胤たねだけ有つて、私ア聞いて居てぽろりと来ました、いやこれは

誰でもポロときますよ、私はね芝居でも世話場でちよつと此様な
 子役の出る芝居へ往つて見物していると、子役が出て母様とい
 と、まだ何だか解らない中にぼろ／＼と直ぐお出でなさる、誠に
 何うも恐れ入りました」

庄「三八さん、此の親子の衆は私が引取つて又敵を討たせる時
 も有ろうし、何にしても親切にしておくれで、今夜は雪が降るから
 お泊め申すから、安心して置いて歸つて下さい」

三「有難う、だから此方に参ると申したんです、有松屋の婆さん
 は出しませんね、何うかお前さん旦那も来て始めて逢つた時にも
 あゝしてくれたんだからと云つても、決してそんな事をする義理
 合は有りませんと云うような顔附から、慾にばかり目を附ける婆

で、彼奴あいつは腹でも切りそうな婆です………まお暇いとま致しましょう、

へい左様なら御機嫌宜しゆう」

美「まことにお草そうく々致しました、車でも」

三「えい私の家うちに帰るんですから、なに車も待たして置きましたから、ちようどあの車に乗って帰ります、へい左様ならお女中、御新様ごしんさまそれじゃお泊とまんなすつて………左様なら」

と三八は帰つてしまふ。これから温あつたかい物でお飯まんまを食べさせて、親子の者を丁寧ていねいに客座敷かたの方に寝かして、自分は六畳の茶の間の方に寝ました。夜よが明けると、お美代が側に床を並べて寝ていた庄三郎の居いないに驚いた。

美「何処へ往つたらう………旦那は何処かへお出でなすつた………

：兼かねや（下女の名）旦那はお手ちようず水かえ」

兼「いゝえ存じませんよ、先刻さつきから此処で焚き附けて居りますが、知りませんよ」

美「何処へ往つたんだらう」

と呼んでも音も沙汰も無い。はて変だ。と思つて二畳の処を開けに掛ると、栓しんぼり張かが支つてあつて唐紙からかみが明きません。

美「旦那」

と、揺ゆすぶるとたんにがらりと転げた音がする。飛び込んで見ると藤川庄三郎は何時いつの間にか合口を取つて、立派に腹一文字に搔切つて死んで居りました。悔びつくりしたのはお美代。

美「さア皆みんなな起きてお出でなさい、良人うちのひとが腹を切りました」

というから店の者も出てまいった。店もまだ開けない中でござ
 います。目の見えないおふみまでも来て子供も死骸に取り縋つ
 て泣き出します。すると傍のかたわら硯箱すざりばこの上に書残した一封が有
 ります。これを開いて見ると、

書遺かきのこし候我等一昨年九月四日の夜奥州屋新助殿をお久ひさの實の

兄と知らず身請されては一分立たずと若氣の至りにて妻恋坂下
 に待まちうけ受して新助殿を殺せつがい害致し候其の時新助殿始めて松山の

次男なる事を打明うちあかし十九ヶ年の年としつき月を經て妹お久いもとに巡り合ひ

身請をして此の庄三郎と夫婦にさせんと存じて約束致し候其の
 歸り途みちなり斯かくなるは不孝の罪持もちあわ合せたる金五百両は其方そなたさま様
 に差し上げ候間是にて妹お久を身請して女房にようぼとなし松山いえの家

を立てさせくれと今際いまわの頼み其の場は遁のがれ去り其の金五百円に
 てお久を身みうけ受致いたし夫婦と相成候それ故に苗字を取とつて松山園と号なづ
 け居りしが昨夜親子の困難を見殊に助太刀の頼み人は知らねど
 心の苦しき又昨年蚩沢にて殺害したる車夫しゃぶ徳藏は妻恋坂下にて
 新助殿を殺したる時に乗せたる車夫にて其の時取り落したる煙
 草入を所持なし居り是を買いくれよと云いかけられ是非無く殺
 害したるに新助殿妻おふみ殿の兄御あにごとは露知らず昨夜の物語に
 始めて知り兄良人の仇おつと申あだ訳相立たず自害致し相果て候我等なき
 後あとく々々是我が財産は松山の御子達おこたちへ引渡し候処 実じつ証しようなり松
 山の家名は二人の子供を以て跡目相続を頼み入り候妻お久は年
 若故再縁致し候様我は兄貴の仇なり心を残さぬ様に斯書かく残し候

との書置に皆打驚き、匆々^{そうく}差配人差添えの上で訴えに相成り
 ます。漸く事^{ことずみ}済になつて、此のおふみの子供をもて相続人に相
 定めます。又お美代は後、後家を立て通して居りましたという。
 おふみが死去の後に子供等が引続きまして松山の家を立てます。
 御徒町の腹^{はらきり}切と人の噂を聞きまして、愚作なれど一冊のお話^まに
 纏^{まと}めました、松と藤のお話でございしますが、先ずこれ^{ぜんび}で全尾で
 ございます。

(扱酒井昇造、佃與次郎速記)

青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の二」近代文芸資料複製叢書、世界文庫

1963（昭和38）年7月10日発行

底本の親本：「圓朝全集 卷の二」春陽堂

1927（昭和2）年12月25日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号はそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼《あ》の」と「彼《あの》」は、それぞれ「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえしました。

入力：小林繁雄

校正：松永正敏

2005年10月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.AOZORA.GR.JP/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

松と藤芸妓の替紋

三遊亭圓朝

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂・編纂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>